
共作小説・大都会の夜

ズラえもん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

共作小説・大都会の夜

【Nコード】

N5700E

【作者名】

ズラえもん

【あらすじ】

岡山の山村から都会に夢を抱き上京した男、夢破れ荒んだ暮らしの中、自らの出生の秘密を知る。予告なく現れる謎の女。白昼の猟奇殺人、相次ぐ理由なき投身自殺・・・数々の怪事件に、ベテラン刑事柊園が挑む。三人の作者が独自の感性でひとつの物語をつないで行く共作小説。

プロローグ 第1部・二重人格（前書き）

この作品は掲示板で仲間を募り、リレー形式でつないで行ったものなので読みづらいかもわかりません。 作者は複数います。

作者名は、私ズラえもん・ながいわかれ・ゴジラ の3人です！
文章に前の（ ）に作者の頭文字を入れています。

私的にはうまくつながったと思っています。

プロローグ 第1部・二重人格

プロローグ

大都會の夜に、始まりも終わりもない……。

そこに暮らす人の心にもまた、明けることのない夜がある

(な)

男は18の時に岡山の高校を卒業して、東京のとある商事会社に、希望と不安に胸をときめかせ就職をしたのだった。

それから10数年・・・男は、どこでどう間違えたのか、30の声を聞いた今は、その日暮しの日雇い生活をしていた。

「俺は何処に行こうとしているのだ・・・」酒におぼれた時の男の口癖だった。

(ズ)

街灯の明かりさえ届かない薄汚れたガード下の屋台で、男はコップの底に残った酒をなめるように飲み干した。

その姿を物陰からそっと見つめる女がいた。

男は空になったコップを恨めしそうに眺めていたが、やがて「ハア

―」と大きくため息をつきカウンターへと静かに戻した。
女はその男が屋台から出るのを確認すると逃げるようにその場を後にしたのだった！

男はフラフラと歩き出した。何処へ行くともなく……

(ゴ)

屋台を後にしてフラフラと歩き出した男は駅前の公園のベンチに座り、俯き加減に頬杖をついて目を閉じた。

物思いに耽りながら一しきり休んでいるところへ、一陣の爽やかな風が通り抜けて行く火照った顔に心地よいひとときだ。

オレンジ色のナトリウム灯の街灯の明かりが見詰めるようにやさしく光を投げ掛けている。

公園の大きな樹木の陰から先ほどの女が遠巻きに男を見詰めている。

女は呟いた・・・ 「やっぱりあの人ね・・・」

かつての商事会社で同じ課のOLだった女は探していた男をやっと見つけたらしい。

男は立ち上がって駅の方に歩いて行くと終電がホームに入って来た所だった。

男は急いで切符を買い改札を通って電車に乗った。女もそれに続いた・・・

男から少し離れて座り、そっと様子を伺う

たまたまこの車両だけ誰も乗ってなくて男と女だけであった。

男は何処まで乗って行くのか？

(な)

”美しい・・・。” 高層ビルの屋上で金網に手をかけ女は呟いた。

女の斜め前方に満月が輝いていた。歳の頃は25、6 満月に照らされた女の顔は、この世の者とは思えないほど妖しい美しさを放っていた。

女は金網を上りはじめ、苦勞しながら金網の向こう側に出た。もう、女の前には何も障害物はない。

”あの人がいつも乗っている電車が・・・もう少しで通る・・・。”

女のはるか前方を美しい光の線となって、電車が通過して行く。

”さようなら・・・。神様、私は天国では幸せになれますか・・・。”

女は胸で十字を切り、電車の方に向かって身を投げた・

(ズ)

初老の刑事は部下である若い刑事の報告に 「なんだと！身元がわからないだ」と！ と苦虫を噛み潰したような顔で振り返った。
若い刑事は、まるで自分が怒鳴られたかのように一瞬身をすくめた

が「はい、彼女の持ち物からは身元のわかるものは何一つ出てこなかったそうです」と、初老の刑事を見た。

初老の刑事は、白いものが混じり始めた長めのもみ上げを指先でつまみながら「うーむ！現場のビルの住人も近隣の住民も誰一人として彼女のことを知らなかった・・・！となると、どこか別のところからやって来たのか・・・！」

初老の刑事の言葉に若い刑事が答えた「だとすると現場となったビルを選んだ理由があるはずです」

若い刑事の言葉が聞こえているのかいないのか、初老の刑事は無言のまま相変わらずもみ上げをいじっている。
考え事をするときの彼の癖であった。

若い刑事は続けた「あのあたりには似たようなビルがいくつもあります、屋上に出られるのはあのビルだけです！彼女は事前にそのことを知っていたのではないのでしょうか。」

初老の刑事は無言でうなずくと「もう一度現場へ行ってみるか」と、つぶやくように言った。

(ゴ)

夜の大都会の都心を縫って郊外に出た電車は終点の波止場が見える無人終着駅に着いた・・

「ひゅーっ！ひゅひゅひゅーっ！・・・」「ぼんぼんぼんぼん」

「……!」 「ぴ……!」 「ぴ……!」 「ぴ……!」 「……」

満月に照らされた波止場は船のエンジンの音やカモメの鳴き声など色んな音が入り混じって波止場特有の独特な雰囲気をかもしだしている……

駅を降りた男はコンクリートの土台に腰掛けて潮風に酔いを冷まそうとしていた。

思いついたようにポケットの携帯を手にとって開けてみるとメールが来ていた!

発信人は女で元商事会社に勤めて居た時の後輩のOLからのものだった。 “さようなら” と、たった一言。

高層ビルの屋上のフェンスを乗り越えダイブした女が予め携帯のメールを書き送信ボタンを押すと携帯を走って来る電車目掛けて投げた後ダイブした!!

キラキラと光ながら投物線を描いて飛んで行く携帯は電車目掛けて消えて行った……

(な)

女は、気づかれない様に男を観察していた。

「かすみ……やっと見付けたわ、あなたの身も心もボロボロにし、あなたの人生までも：目茶苦茶にした男……来栖健二を……」

女は独り言のように呟いた。

女の名は加島礼子28歳。来栖の昔の同僚であり、今は小さな運送会社の経理事務をしている。礼子が入社したその次の年、向坂かすみが入社して来た。郷里が同じだった事もあり、二人はすぐに打ち解け親友になった。

礼子借りていたアパートに、かすみも一緒に住むようになった。・そんな時である、来栖健二が、かすみを誘惑して来たのは・・・・。

礼子は、はっと我に返った。来栖がポケットから携帯を取り出して見ているのだ。どうやら、何処からかメールが来ていてそれを凝視している。

”あんな奴にメールをする人間がまだいたのか・・・!?”

礼子は腹が立ってきた。

来栖はフラフラと立ち上がり歩き出した。

「臨港苑・・・」礼子は来栖が入って行った建物の表札を読んだ。それは、アパートと云うよりは、まるで放置されている あば らや であつた。

礼子はニヤツと笑い。携帯を取り出して、かすみの電話番号を押した・・・・。

(ゴ)

若い刑事が付近の遺留品を探していると都電の線路脇にピンク色のプラスチックの欠片を見つけた。

「これは何でしょう???」と初老の刑事に見せる・・・

(ズ)

初老の刑事、柊園は手渡されたプラスチック片をつまみ上げ「鑑識に回せ！・・・」と相棒である若い刑事 向井に言った。
向井は用意していたビニール袋にプラスチック片を入れながら「はい！」と力強くうなずいた。
柊園は、もみ上げをつまみながら「ほかにまだあるはずだ。向井くん、事件に関係があるうがなろうが、落ちてるものは片っ端から拾い集めるぞ！」と草むらにしゃがみこんだのであった。

礼子のかすみの電話番号を押すと耳に押し当てた。
しかし聞こえてきたのは、かすみの声ではなく「この電話は電源が入っていないか、電波の・・・」というガイダンスの声だった！
「かすみ！！何してんのよ！！」

礼子は苛立ちながら何度もリダイヤルのボタンを押した。

向井直哉現在29歳は、今年で3年目を迎えるまだまだ駆け出しの刑事である。IT機器に触らせれば天下一品。手帳の代わりに携帯モバイルを持ち歩くデジタル人間である！

向井は、署の会議室で大先輩である柊園茂男警部補とテーブルを挟み向かい合って座っていた。
テーブル上には二人が線路脇から拾い集めた様々なものが並べられている。

向井はその中の一つを指差し「鑑識の結果、これは携帯電話の破片だということがわかりました。中でもこれはSIMカードといって携帯電話の情報が保存されている部分です！」

柊園は、もみ上げをいじっていた指をぴたりと止めると「そこから通話履歴などが引き出されるのか？」

向井は首を左右に振りながら「いいえ！通話履歴やメール文章などは本体側のメモリー領域に保存されていて、SIMカードにはその携帯の持ち主が情報を移動させなければ残りません。SIMカードというのはナンバーポータビリティ・・・」

そこまで言ったとき、柊園は「まてまて！君の話は私には理解できません。その・・・何とかというカードから何が分かるかだけを説明してくれ。」と、またもみ上げを触り始めた。

向井は、柊園警部補に説明を終えると自分の携帯を取り出した。

「警部補！携帯電話のSIMカードというのはほとんどが世界共通なのです。」

そう言う向井はSIMカードを自分の携帯のものと差し替えた！しばしのボタン操作ののち「出ました！これがこの携帯自身の電話番号です！」と、柊園警部補に差し出した

柊園警部補は無言で受け取ると「うん・・・これがもし彼女のものだったとしたら、ここから身元を割り出すのは容易だな。」
二人の刑事はテーブルを挟んだままうなずきあった！

(な)

「ふっっ！」来栖は一息ついた。今日の日当一万円を現場監督から受け取ったのである。

腕時計に目をやると、午後8時過ぎを示していた。

「皆さん、本日はお疲れ様でした。明日は7時半までに集合場所に集まって下さい。尚、人数は15人までです。」そういうと、現場監督は自家用車に乗ってさっさと行ってしまった。

”15人か・・・今日の半分の人数だ・・・”来栖は思って駅へと急いだ。

秋葉 剛は酔っていた。 関東一円を牛耳る暴力団 富士見会の若頭を任されていた。15で上京して、富士見会会長に拾われ今の地位までになった。

“ドン” という音とともに誰かとぶつかった。 「すみません・」と言って相手は立ち去ろうとした。

「まてい！」 秋葉は相手の肩をもった。 ものすごい力だった。相手は秋葉の方に振り向いた。年の頃は30前後・・・不安が顔全体を覆っていた。しかし、顔は整っており、女を引き付ける何かを持っている顔立ちだった。

「何か・・・？」 男は恐る恐る聞いた。秋葉の一番嫌いな顔立ちだった。

無言で秋葉の右ストレートが、男の顔面に決まった。 強烈な一撃であった・・・男は3メートル位吹き飛んで、大の字になりピクリとも動かない。

”死んだんじゃないのか？” ”救急車・・・救急車”と 野次馬が騒ぎ出した。

秋葉は少し遣り過ぎたかなと思いその場を立ち去ろうとした・・・その時。

「待って下さい。」と静かな声で秋葉を呼びとめる声がした。秋葉は振り向いたが、声の主は分からなかった。

そのとき、秋葉の目に信じられない光景が写った。大の字に伸びていた男が、上半身をゆっくり起こしたのである。

「ほんとに、来栖は女も喧嘩も駄目なんだから・・・」倒れていた男は、独り言を呟き、今度は、茫然としている秋葉に向かって静かな声で言った。

「お前！ 死ねえ・・・」

(ズ)

そのとたん、来栖は薄れ行く意識の中で “ば・・・ばけもの・・・” と叫びながら走り去る秋葉の姿と、遠ざかる男の影を見たような気がした！

(な)

枅園と向井は、女が飛び降りた(?) 高層ビルの屋上にいた。

あれからの調べで、女の身元が判明した。名前は向坂こうさかかすみ 26歳 無職 住所は東京都品川区・・・メゾン・ド・ソレイユ3階3

03号 尚、同居人がいて名前を 加島礼子28歳 もっとも、彼女の方が借主で、のちに向坂かすみが同居するようになったらしい。

「どう思います・・・柊園さん？」 向井が、柊園の横顔を見ながら言った。

柊園は金網越しに、眼下に広がる景色を観ていた。

「綺麗だな向井・・・」 柊園はもみあげをいじった。

「僕は景色の事なんか聞いてませんよ、先程の・・・」

「分かっておる、加島礼子の話だろう・・・」 柊園は一度言葉を切り、向井の方に向き直って話し始めた。

「“かすみ”は来栖に殺された！ と、言うのだろう。 しかし、この金網の向こう側に、本人の意思以外で出すのは無理ではないかな。」

「でも、遺書はなかった。」

「しかし、ノイローゼ気味で、仕事が出来る状態ではなかった・・・」
「今、思いついたんだが、遺書は携帯電話ではなかろうか・・・?!」

その時。遙か眼下を電車が通過している。

二人は思わず顔を見合わせた。

「よし、来栖のアパートに行ってみよう向井君!。」そういうと、
柾園はもみあげをいじりながら、走り出していた。

” 確か川崎のはずれにある・・・臨港苑・・・だったな。” 向井も
後に続いた。

(ズ)

来栖が意識を取り戻したとき、そこに秋葉の姿はなく、とつぷりと
暮れかかった街並みに、イルミネーションが輝き始めていた・・・

来栖は袖をたくし上げて時計を見ると駅の方へと急いだ!

そのときまたしても先ほどの声が ” おいおい! まだ気づかないの
か? ”

来栖は「ハッ!」と立ち止まり辺りを見回した。そこには何者の姿
もない。

” 鈍い奴だなまったく・・・俺はお前だよ!”

どうやら謎の声は来栖自身の頭の中で響いてるようだ。

” さっきのやくざ者を倒したのはお前だ・・・お前がその手で倒し
たんだ”

来栖は後頭部に痛みを覚え、その場にしゃがみこんみ ” でもあい
つを殴り倒した男は俺とは反対のほうへ・・・” と心の中で訴え
かける。

声の主は話し続ける。

” 反対のほうへ歩き去った男もお前自身なんだよ、だがその姿はお

前しか見えない！お前は俺で俺はお前なんだ、奴に殴られ倒れたとき以後頭部を打った、その弾みで俺とお前という二つの人格が同時に現れたのさ。歩き去った男は、俺がお前の頭の中に描いた俺の姿・・つまりおまえ自身、もう一人の来栖健二なんだよ！

来栖は頭を抱え身動きが取れなくなっていた。”何なんだ、いったい・・・もう一人って・・・俺自身で・・・

やがて男の声が聞こえなくなると後頭部の痛みも嘘のようにひいていった。

来栖は赤くなった拳を見つめつぶやいた ” かすみが言っていたのは本当だったんだ”

くその日、来栖は熱を出しアパートでうなされていた。目の前はぼやけ喉は焼けるように痛んだ！半分ほど開いた窓から聞こえてくる都会ならではの喧騒が、来栖の頭の中でエコーがかかったように響いた・・・どのくらい眠っただろう、目を覚ますとかすみがいた！

「熱は下がったみたいね・・・私帰る！！」 かすみはやけによそよそしい、少し怒っているようにも見える。

かすみが言うには、枕元に座っていた自分に来栖は突然起き上がり、何度も殴りつけたというのだ・・・そんなことが後にも何度かあった！

しかし来栖自身は何一つ覚えていない。

以前勤めていた商社会社でも、理由もなく突然暴れたなどと覚えのない嫌疑をかけられた事もある。

来栖は確信した。
”俺は二重人格なんだ！！

第2部・誘導自己暗示（前書き）

ズラえもん・ながいわれ・ゴジラ 三人の共作です。
（ ）の中は作者の頭文字です。

第2部・誘導自己暗示

(な)

加島礼子はアパートに籠ったままであった。

” かすみが自殺した・・ ” 礼子には信じられなかった。確かにノイローゼ気味だった。

しかし、死んだ日の朝、仕事に行く私に向かって、「もう、吹っ切れたから大丈夫よ。」

そう言って、かすみはニツコリほほ笑んだ。

昨日来た刑事たちの話では覚悟の自殺らしい、私はどうしても信じれないから、来栖の事を話した。

一瞬2人の刑事の目が輝いたのを、私は見逃さなかった。

私は、有ること無いこと2人の刑事に喋った。刑事たちは礼を言って、帰って行った。

しかし、来栖が犯人でない事は、私が一番良く知っていた。かすみが生んだ時間には、来栖と私は一緒の電車に乗っていた・・この事は刑事たちには、言っていない。

かすみが生殺したとしても、来栖が生殺したようなものだ。

今、彼女は司法解剖されて、警察病院の霊安室の中にいる。明日朝早くに、両親が引き取りに来るそうだ。

“ 来栖のアリバイの証明など、絶対にしてやるものか・・!! ”

礼子は心に固く誓った。

礼子の両目から、大粒の涙が頬を伝って流れおちた・・・。

(ズ)

柊園と向井は来栖のアパート臨港苑へ出向いたが、そこに来栖の姿はなかった！

柊園は 「くそーっ！無駄足だったか・・・ところで向井君、君のアパートは署の近くだったな。」

向井は 「はい、僕のアパートでコレを見てみますか」と、ポケットから一枚のDVDを取り出した。加島礼子から預かったものだ！アパートに着くと向井は冷蔵庫から缶コーヒーを取り出し柊園に手渡した。

プレイヤーの再生ボタンを押し、画面に映し出された映像に二人は顔を見合わせた。

そこに映し出されたものは二人のやくざ風の男に弄ばれる 向坂かすみ の姿である。

男たちのなすがままにされるかすみの目は一点を見つめ、声も上げなければ抵抗もしない・・・明らかに薬物で意識がはっきりしていないのがその様子からうかがえる。

柊園はもみ上げを触りながら 「そこに映っている片方の男は、間違いない暴力団 富士見会若頭の秋葉 剛だ・・・おそらく来栖は富士見会とつながりがあるんだ」

そういうと柊園は飲み干した缶コーヒーの空き缶を目の前のテーブルの上に ”タン” と音をたてて置いた。

向井はプレイヤーからディスクを取り出しながら 「富士見会の事務所へ行ってみますか？」と、柊園の顔を見た。

柁園はディスクを指差しながら「向井君・・・その、なんだあゝBVD、あいや”デーブイデー”てのか・・・私はそれを持ってきた女が何かかくしてるような気がしてならんのだよ。」

向井は、内ポケットからメモ帳代わりの携帯端末を取り出すと「彼女は確か・・・加島礼子28歳、住所は・・・」
柁園は向井の言葉をさえぎり立ち上がった

「加島礼子のところに行ってみるぞ!!」

加島礼子は、かすみの遺体をひきとりに来ていた両親と会っていた。手続きを済ませ署から出てきた両親に「あの日私がそばにいらなかったばかりに・・・こんなことに」と、頭を下げる礼子に、母親は左右に首を振りながら「加島礼子さんですね？ かすみはあなたと友達になれたことを大変喜んでました、あの子からの手紙にはかならず礼子さんの名前が出てきていたくらいです。」と手を握った!

かすみの父親は「礼子さん! 警察はあの子が自ら命を絶った理由がわからないと言っていました・・・かすみが自殺だなんて・・・私には信じられません!」

礼子は二人の手を交互に握ると「私も信じていません! お父さん、お母さん、とにかく今は かすみ を早く皆さんのところへつれて帰ってあげてください。」と、深々と頭を下げるばかりであった。

(な)

「ふっ！」 来栖はいつもの屋台で、コップ酒をあおっていた。
今日は仕事にあぶれてしまった……。昨日の事があり、少し寝坊したのだ。

来栖の頭の中は、仕事にあぶれたことより、かすみとの思いが駆け巡っている。

「お客さん、どうしました。今日は元気なですよ。」 と、屋台のおやじが聞いた。

来栖は黙って首を振ると、金を置いてふらふらと、駅に向かって歩きだした。

「かすみ……っ！ もう一人の俺が、お前に何をしたんだ！」
来栖は大都会の街並みに向かって大声で叫んだ。

”俺は何で此処にいるのだろう……” 秋葉は思った。
高層ビルの屋上に、今自分は立っている。金網を登って……向こう側に出る。もう、秋葉の前には障害物はない。

”何か、おかしい……” 秋葉は自問自答をする。

少し欠けた、月が美しかった。 ”月が美しい……??” な
ぜ俺が、そんな事を思うのだ。

「お前……死ね！」 どこかで聞いたような言葉が、秋葉の頭の中で響いた。

秋葉は両手を広げ、ビルの屋上から思い切りダイブした……。

光の線をひいて、終電車が通過していた。

来栖は目が覚めた。目覚まし時計は午前9時を告げている。

”しまった・・寝過した。”もう、今日の仕事には、いくら急いでも間に合わないのは明白な事実であった。

来栖は、白黒TVのスイッチを入れ、顔を洗うため立ち上がった。
ズキズキと頭が痛んだ。

”飲み過ぎたかな” テレビに目をやると、興奮した口調で女リポーターが、喋っている。

「……自殺したとみられるのは、秋葉 剛さんで、昨日夜遅くこの私の後ろに建っている高層ビルから……」

テレビ画面に映し出された写真を見て、「あっ！」と来栖は叫んだ。

その時、激しい頭痛が襲った。しばらくして、頭を抱えていた両手を放し、来栖はニヤツと笑った……。

加島礼子は、頭が寝不足を訴えていた。 ”おかしいわ、昨夜は早

く寝たのに・・・今日は、仕事に行かなければ。”礼子は顔を洗うために立ち上がり、テレビのリモコンのスイッチを入れた。

「昨夜、高層ビルから男性が飛び降り死亡しました。死亡したとみられるのは、持っていた免許証から、秋葉 剛さん（45）と見られています。尚、このビルからは数日前、ほぼ同時刻に若い女性が飛び降りて亡くなっております・・・」

”ガシャーン” という音とともに、皿の破片が飛び散った。テレビに背を向けている、礼子の身体が小刻みに震えていた。

”ウツ・・・ウツ・・・クック・・・クツ・・・” 泣いているとも、笑っているとも分からない声であった。

礼子はくるっと向きなおると、テレビに向かって不敵な笑みを浮かべていた。

向井は大あくびをした。昨夜遅く加島礼子のアパートに柵園と向かった。

しかし寝ているのか、いくら呼び鈴を鳴らしても、出てくる気配はなかった。

向井が、顔を洗っていると携帯が鳴っている、柵園からだった。

「昨日遅かったのに、オジンは朝が早いなあ」向井は笑いながら携帯を取った

「向井・・・！ 秋葉が飛び降りて死んだ・・・殺しかもしれん」

向井はしばらく携帯を手を持ったまま動かなかった……。

(ズ)

加島礼子はテーブルに置いた携帯電話の呼び出し音に驚いた！

ディスプレイには見たことのない電話番号が……

礼子是不審に思いながらも通話ボタンを押した。

電話は かすみ の父親からのものだった。

父親が言うには、かすみの荷物を整理していたところ衣装ケースの中のコートのポケットから携帯電話が出てきた。そこに自殺の理由の手がかりでもないものかとあれこれ操作していたが、どうやらロックがかかっているようで電源こそ入るが何一つ操作できない。

そこで、同居していた礼子なら暗証番号を知っているかもしれないと思いかけてきたのだという！

礼子は一瞬 ” ハッ！ ” と息を呑んだが、すぐに「暗証番号となるとさすがに分かりません」と答えた。

かすみの父親は「そうですよね、早朝から申し訳ありませんでした。もしなにか思い出したら連絡ください！」と電話を切った。

” かすみのやつ……携帯を二つ持ってたのか…… ”

切れた携帯電話を握り、グツと唇をかみ締める礼子であった。

(ゴ)

また同じビルの屋上から同じ時間に2人目の飛び降り自殺・・・

「きっと何かがある??・・・」

そう思って腕を組んで考え込む柊園警部・・・

秋葉が飛び降りる前に先に飛び降り自殺したかすみの自殺の原因がまだ調査中なのに・・・

かすみが来栖と繋がりがあった事だけはわかったけれど、それと自殺との因果関係は柊園達にはわからない・・・

来栖がかすみを誘惑し時々かすみが来栖のアパートに泊まりに行っていた事は礼子も知っていた。

来栖はかすみに対して優しくだったのでかすみは来栖に誘われるといつも一緒にいた！

しかし、来栖の優しいのは酒を飲まない素面の時だけで、酒が入ると気性が変わる・・・

何か気に入らない事があるとかすみに八つ当たりして暴力を振るっていた。

“かすみ” は怖かった・・・礼子にも相談した。

“もう別れよう” 何度も思った。

それでも、元の優しい来栖に戻ると、やはり離れられなかった・

“この人2重人格かしら？・・”
“！！”
そう思っても離れられない

しかし飲む度に暴力を受けるので好きなんだけど、それに耐えられず自殺したとも考えられると かすみ の事を知る礼子は判断していた。

しかしそれと秋葉の飛び降り自殺と何か関係があるのか？・・

かすみの死を無駄にさせない・・ そう思った礼子が仕組んだトリック殺人かも知れない？・

(ズ)

数日前

その日暮しの日雇い生活が続いている来栖健二は、昨日から仕事にありつけず公園のベンチに腰を下ろしていた。そこに向坂かすみ が紙袋を抱えてやって来た！

「こんなことだろうと思った！」 はい”これ食べて！ どうせ何も食べてないんでしょう？」と、紙袋の中から取り出したサンドイッチを差し出した。

来栖は申し訳なさそうに受け取ると無言でかじりついた。

かすみはお茶のペットボトルのキャップを開けながら 「私・・今日病院にいくために会社をお休みしたの」

その言葉に来栖は「病院・・・？」と顔をあげ「病院で・・・どこか悪いの？」と かすみの顔を見て周囲の異変に気づいた！
かすみの目線は自分ではなく、公園の隅のに向いていた。

公衆トイレの裏からガサガサと枯れ葉を踏み鳴らし5～6人の浮浪者らしき男たちが現れたのだ。

(な)

「な・・・何か・・・？」 来栖が言った

「見せつけてくれるねえ。」と、浮浪者の一人が言って、かすみをジロリと睨んだ。

「逃げるんだ・・・！」 来栖は、かすみの手を取って走った。

しかし、浮浪者たちの動きの方が少し早かった。

来栖とかすみは、6人の男たちに囲まれてしまった。

「逃がさないぜ！」 浮浪者のうちの一人が凄んだ。

来栖は覚悟をきめ、かすみに「俺が何とかしている間に隙を見て逃げろ」とささやいた。

来栖は奇声をあげ、6人の男たちに向かって行った。

かすみは、来栖が浮浪者達に一方的にやられているのを茫然と見ていた。

「に・・・逃げろ・・・かす・・・み・・・。」

かすみは、我に返ると一目散に走り出した。

しかし、すぐに浮浪者達に取り押さえられてしまった。かすみは来栖に助けを求めた。

来栖は、二人の男たちに無抵抗で殴られている。その男たちも、気を失った来栖を地面に叩きつけ、かすみの方にやってくる。

”もう駄目だ” かすみは観念した。と、その時。

「その、女から離れてください。」まるで、その場に相応しくない口調だった。

浮浪者達は、その声のほうに振り向いた。来栖が倒れているだけだ。

「汚い手で触らないでください。」倒れていた来栖が、上半身を起こしながら言った。

「その女は、私の獲物です・・・。」

それから一般市民の通報で警察官が駆け付けた時には、6人の浮浪者らしき男たちが半死半生で倒れているだけで、襲われていた男女の姿は見当たらなかった。

(ズ)

しきりともみ上げを触りながら考え込む柊園警部補のもとに、向井刑事が携帯端末を持ち近づいてきた。

「警部補！向坂かすみが通っていた精神科の医者に会ってきました！彼女は何かの暗示にかかっていたのではないのでしょうか。」

普段は感情の現れない柊園の目が鋭く変わった「何かの暗示・・・どうということだ？」

向井は柊園に椅子を勧めると「彼女の担当医は”クーエの自己暗示法”という治療法に力を入れていたそうです！」

向井はつづけた

「”クーエの自己暗示法”とは、フランス北東部に住む“エミール・クーエ”という薬剤師が、期限を過ぎ色も褪せた薬を売った。クーエは成分的にも効力もなく効く訳がないと考えていた！しかし後日薬を買った男が”あの薬をのんだら病気が治った”とお礼を述べてきた。そこでクーエは、薬の効果には薬という物質の他に、必ず治るといふ『思い』が働くのではないかと考え薬剤師をやめ、”クーエの自己暗示療法”という治療法を始め、世界的に有名になりました。

そのクーエの自己暗示療法の中で「誘導自己暗示」というのがあります。

誘導自己暗示というのは、他人が本人の持つ「潜在意識」に外部からアクセスすることであり、暗示は潜在意識へインプットするため

のプログラムであるわけです！ この鍵である暗示を適切に潜在意識へインプットできれば、潜在意識はそのプログラムにしたがって、全力をあげて動き出すのです・・・つまり、他人をコントロールすることも不可能ではないのです。」

向井は説明を終え携帯端末をパチンと閉じた！

柊園警部補は「君の言わんとする事がよく分からん！！」 潜在意識” に外部からアクセス・・・そりゃ、どういうことだ？」

向井は柊園の座る正面の椅子に腰を下ろした。

「分かりやすく言うと”催眠術”のようなものです！

鋭く尖っていた柊園の目に普段の色が戻り、やがて苦笑へと代わって行った。「なんだあゝっ！」 催眠術”だあゝ！・・・二人の人間の自殺の原因が催眠術・・・それが君の推理かね？」

向井は「何が可笑しんですか・・・！！ エミール・クーエは実際にたくさんの人を救ってるんですよ！ その逆だって・・・！」と口を尖らせる。

柊園は立ち上がり窓の方へ歩きながら「まあいい、だがこの件は終わりだ。本部で二人は単なる自殺だという意見がまとまった」

向井もあとを追うように立ち上がった。向井が勢いよく立ったため、座っていた椅子が”ガタン”と大きな音をたてた。「終わって・・・じゃあ捜査は打ち切りですか？」

枅園は倒れた椅子を起こす向井のほうに振り返り「表向き」はな・・・だが、君も知っているとおり、○×公園の浮浪者暴行事件は解決していない！ しかも来栖健二と向坂かすみ関わっている・ ・ ・来栖健二は富士見会とつながりがあり、また 向坂かすみも富士見会の秋葉 剛と一緒にビデオに写っていた。私は、君の推理は別にしても、たんに自殺でかたをつけられないと思っている・ ・ ・私は派手な動きはできんが、君は浮浪者暴行事件の捜査を名目にこのまま続けてくれ！」

窓から差し込む光りを背に、もみ上げを触る枅園の姿がシルエットとなり、輝きを増した向井の目に映っていた！

第3部・加島礼子（前書き）

ズラえもん・ながいわかれ・ゴジラ 三人の共作です。
（ ）の中は作者の頭文字です。

第3部・加島礼子

(な)

柊園は昔堅気の刑事だ。今まではコツコツと歩きまわって、事件を解決してきた。部下の向井の言う事は自分には理解できないことが多い。

しかし、秋葉の自殺だけは自分でも理解できない。

他人を自殺に追いやって、自ら命を絶つ人間ではない。その秋葉がどう考えても自殺とは思えない方法で死んだのだ。

柊園は、もみ上げをいじる手を止めて、頭を抱えた…………。

「俺はもう、過去の刑事なのか!？」

柊園は向井の、若さ・知識・行動力に嫉妬していた。

「直哉! 待ったあ……」向井の婚約者である並木 恵が、息を切らしながら走ってきた。

「遅いぞメグ!」向井は公園のベンチから立ち上がり、少しすねて見せた。

二人は、一か月後の11月29日に、都内にある小さな教会で結婚式を控えていた。

「さあ、映画でも見るか……それとも、少し早いご飯でも食べるか?!」

「まだお腹すいてないから、映画観ましようよ。私、観たい映画があるの。」

恵は、向井の腕に手をまわして悪戯っぽく笑った。

しかし、向井の目は何所か遠くを見ている。

その視線の先に、白いドレスの女が歩いていた。この公園は広い、2人の居るところからはかなり離れている。

「知ってる人なの？」 恵は不安そうに聞いた。

向井はそれには答えず、「あの女が歩いて行っている先の公園の向こうにある大きな建物は？」と、逆に聞いた。

「榊原心療病院よ。都内では有名な病院だよ。」

「クレーエの自己暗示療法……。」

恵は向井の顔をまじまじ見つめて、「よく知っているじゃない、その、何とか療法の第一人者がいるそうよ……そんな事より早く映画行こうよ。」 恵は甘えた口調で促した。

白いドレスの女は、公園を横切って榊原心療病院に行ったように向井には思えた。

”あの女は、確かに加島礼子だった。何か、偶然ではない気がする。”

「ごめんメグ、この埋め合わせは、きつとするから・・・。」
そう言うと向井は、白いドレスの女が歩いて行った方向、榊原心療病院に向かって走り出していた。

啞然としてその後ろ姿を見送っていた恵は、「刑事の妻は大変ね」と呟き、向井の姿が見えなくなるまで立ち尽くしていた。

それが、向井直哉を見た最後になろうとは、恵は夢にも思わなかった。

(ズ)

向井に単独行動をさせた枅園だったが、彼もまた密かに捜査を続けていた。

枅園は喫茶店の一角で精神科医 滝川秀治 と会っていた。

滝川は自殺した向坂かすみの担当医で、主にカウンセリングと彼独自の治療法”誘導自己暗示”を行っている。

枅園はホットコーヒーを二つ注文すると、滝川に”誘導自己暗示”について詳しく聞いた。

滝川は出されたコーヒを一口啜ると話し始めた。

「自己暗示というのは、たとえば誰かにチーズを食べさせたとします。その後”そのチーズは腐っていた”と告げます、するとその人は吐き気や腹痛を訴える・・・でもチーズは腐ってなどいないのです！ 痛んだ食べ物を口にした不安がその人の持つ”潜在意識”へ働きかけるのです。その”潜在意識”へ外部から刺激を与える・・・それが”誘導自己暗示”なのです。」

黙ってうなづき”もみあげ”をさわる柊園に滝川は話しつづける！

「私の治療に薬品は使いません！ 私が患者に与える薬はこれです」と、CDウォークマンを差し出した！

柊園は受け取るとヘッドホンを耳に・・・しばらく聞いていたが「これが治療になるのですか？ 私にはただゆったりとした音楽しか聞こえませんが」

滝川はうなづくと「そのとおりです。ただの音楽です！ でもそこには音楽のほかに人間の耳で聞き取れない音域で私の声が入っているのです・・・たとえば犬の怖い人には”犬はかわいい 犬は怖くない”というぐあいに音楽とともに繰り返してゐるのです。耳で聞き取れない音域でも、それが音として認識できないだけで人間の鼓膜には届いています。それが、繰り返しすることで本人の意思に係なく、少しずつ潜在意識に働きかけるのです。」

柊園は、もみ上げを触っていた手をコーヒカップへと移しながら「”誘導自己暗示”・・・それは、たとえば治療ではなく、逆にも利用できますか？」 とたずねた。

柊園の問いに滝川は「逆といいますと？たとえば”誘導自己暗示”を使ったその人物を誘導し犯罪を犯させるとか・・・ですか？」

柊園は「まあ・・・そういった類です！」

滝川は考えることなく、すぐに「可能だと思います！」 と答えた。

柊園はさらに質問をつづけた。

「あなたのほかに”誘導自己暗示”を行える人物をご存知ありませんか？」

滝川は首を軽くかしげ 「さあ！ いるとは思いますが私の知る限りではありません．．．．あっ！ そういえば、私が大学の講師時代 ”誘導自己暗示” を研究していたことですが、一人の女子生徒が非常に興味を持ち助手を名乗り出た．．．彼女ならできると思います。」

柊園はコーヒーカップを口元に運びながら 「その女子生徒の名前は覚えていますか？」

滝川はすぐしばらく考えるように下を向いていたが、やがて顔を上げると 「確か．．．かしま．．．加島礼子だったと思います。」

柊園の持つコーヒーカップが小刻みに揺れていた！

（な）

柊園は疲れていた。

（それは可能です．．．確か．．．加島礼子です。）柊園の頭の中を、先程の滝川医師の言葉が駆け巡っていた。

”もしかしたら、向坂かすみと秋葉 剛は、我々の常識を域を超えた方法で殺されたのかもしれない。”

滝川医師の話聞いて、加島礼子をもう一度あたってみようと思うのであった。 しかし、捜査本部は”自殺”ということで、解散し

ている。

その時、柊園の携帯が鳴った。昔堅気の柊園も仕方なく、署で支給された携帯を持っていた。

「向井か？どうした・・恋人と喧嘩でもしたのか!？」電話は、今日は非番の向井刑事からであった。

「柊園さん！大変なことが分かりました。もう少し、調べないことにははっきり言えませんが、あの二人は自殺ではありません。」

「何を言っているんだ、お前は今日デートだろう・・・。」

「いや途中で加島礼子を見付けて後を付けたんです・・・。とにかく、もう少し調べてみます。明日朝、署で報告しますから。」

「俺の方も、今日滝がわ・・・。」柊園が喋っている途中で携帯が切られた。

「せっかちな奴だなあ。しかし、何がわかったのだろう・・・?!。」

柊園は呟き苦笑いをして携帯をポケットにした。

それが、柊園が聞いた向井の最期の声に成ろうとは、流石の老刑事にも分ろうはずもなかった。

(ズ)

携帯をポケットにした柊園は、ある建築現場へと足を向けた。

そこには来栖健二を日雇い人として雇っていた現場監督で、田村という50半ばの、いかにもガサツそうな小柄の男が待っていた！
柊園は簡単に挨拶を済ませると、来栖健二について聞きたいことがあると告げた。

田村は「来栖ねえ．．．あいつにはこのところ仕事を与えてないですよ。あいつは仕事もできる上まじめなんだが、なんか気持ちが悪くてなあ！」

柊園は手帳を開きながら「気持ちが悪いとはどういう意味なんでしょう？」

田村は柊園に手招きし、小さな仮設事務所へと案内した。

「本当は来栖もこの現場に入れるつもりだったんだが、あいつはねえ、突然意味もなく切れやがるんですよ！俺のところへ来るようになった最初のころはそんなそぶりさえなかったんだけどな．．．それさえなけりゃなあ！とにかく今人手がたらねえからな．．．
○×公園の浮浪者暴行事件、刑事さんも知ってるでしょう！」

やられた浮浪者ってのは俺のところで世話してた奴らですよ、ねぐらこそ持たない連中でしたが現場ではまじめで信頼できる連中でした．．．」

柊園は「あの浮浪者たちがこちらで．．．ということとは、あの6人と来栖は顔なじみだったわけですね？」

田村は「いや、それはどうかな？現場に入れば誰と誰が．．．てのはわからないですねえ！道中のバスの中もろくに口を聞く者はいませんから。」

柊園はそこまで聞くと、たわいもない世間話に話題を移し10分ほどでその場を後にしたのだった。

柊園は建築現場を出ると浮浪者暴行事件の被害者6人が入院する国立病院へと向かった。

意識不明だった6人のうち、2人は意識も戻り回復に向かっているとの情報が入ったのだ！

そのうちの一人が面会に応じてくれた。

病院の受付で話を通し、ロビーで男を待つ柊園警部補・・・やがて車椅子に座った無精ひげの男が現れた。

柊園は立ち上がり、男に頭を下げ「無理なお願いを聞いていただきありがとうございます。」と警察手帳を見せた。

無精ひげの男は「あんたが警察の人だってことはさっき看護婦さんから聞いた・・・それより俺をこんな目に合わせた奴はまだつかまってないんだろう？」

柊園はもみ上げを触りながら「そのことなんですが・・・あなたはその犯人の男を知ってるんじゃないですか？」

無精ひげの男の眉がピクリと動いたように見えた。

「なんだと、あんたもか・・・犯人は見てねえよ！昨日来た若い刑

事さんに話したとおりさ、あの日公園でアベックを見つけたのさ、それが日雇いの建築現場でちよくちよく顔だけは見かけてた奴でな、だが話したこともなけりゃあ名前も知らねえ奴よ・・・きれいな姉ちゃんとかあの公園でいちやついてやがったから、ちよつとからかうつもりがついついやりすぎて奴はのびちまった！”やばい”てんで逃げ出そうとしたところを後ろから・・・でこのザマよ!! たぶん仲間が居やがったんだ。”

しゃべり続ける無精ひげの男

第4部・俺は、ウルトラマン（前書き）

ズラえもん・ながいわれ・ゴジラ 三人の共作です。
（ ）の中は作者の頭文字です。

第4部・俺は、ウルトラマン

(な)

話は変わって、榊原心療病院に戻って来た滝川は、自分の部屋で煙草をふかして、その目は天井の一点を見つめていた。

加島礼子は氷のような心をもった生徒だった。

その時、内線が鳴った。

「はい、滝川です。」 内線は婦長からで、加島と名乗る女性が面会を希望しているとの事を告げた。

しばらくして入って来たのは、美しい女性に変身した加島礼子だった。

「久しぶりだね。」 そう言って滝川は礼子をソファに案内した。しばらく二人は、昔話しに熱中していた。

「先程刑事と会っていてね、心療療法の事について熱心に聞いてたよ、悪いと思ったが君の名前も出さして貰った。そうしたら、今度は君の訪問だ・・・」

・・・で、君の要件は?！」

加島礼子は思わずソファから立ち上がった。その時、五階にあるこの部屋の窓から、病院を伺っている向井刑事の姿が見えた。

「先生、また来ます。」 「気分でも悪いのか? 顔が真っ青だぞ・

・。
」

加島礼子は滝川の言葉には答えず、白いドレスを翻して逃げるように、部屋を出て行った。

(ズ)

柊園は暴行事件の被害者の一人から話しを聞いた、しかしその男からは特別新しいネタは得られなかった。

署に戻りカップメンをすすっているところへ電話が鳴った！ 柊園が出てみると、それは自殺した ” かすみ ” の父親からのものだった。

父親は ” かすみ ” の死が自殺として処理されたが、柊園の計らいで向井が捜査を続けている事を向井からの電話で知った。 そのお札を兼ねての電話であった。

父親は受話器の向こうで何度もお礼の言葉を述べたあと 「娘の荷物の中から携帯電話が出てきてまして・・・ロックがかかっていたため、携帯ショップで事情を話して解除してもらい、内容を調べていたのです。 残念ながらたわいもない会話を交わしたメールが残されていたくらいで特に自殺の理由につながるような内容のものはありませんでした。」 と告げた！

柊園は「そうですか、彼女は携帯電話を2つ持ってたんですね！ たぶんそちらのほうは普段使ってなかったのでしょうか、普段使ってたと思われる携帯電話は線路脇でこなごなになってました。」

父親は「でもそのメールの中の一つに添付されていた音楽があるの

です。が私はたぶん”かすみ”が好きだった曲なのだろうと思い、詳しい人に頼んでその曲を”CD”にしてもらいました。そして”かすみ”の霊前で聞かせてるのですが、それが・・・なんとも妙なんです！！」

”かすみ” の父親の言葉に受話器を握る柊園の手に力が入る。

「妙・・・！！妙といいますと？ただの音楽ではないのですか？」

父親は 「いえ、ただの音楽です！ 私が不思議に思ったのは、うちには老犬が一匹います、普段は寝るばかりで声さえ上げないのですが、その曲が聞こえると決まって落ち着きがなくなり狂ったようにほえるのです！」

柊園は生唾を飲むように ”ゴクリ” と喉を鳴らすと 「おとうさん！ そのCDと携帯を大至急こちらに郵送してください！ それと、絶対に複製を作らないでください。私の読みが正しければ、あなた方家族は持っていないほうがいい！！」

父親はそれが捜査の役に立つならばと承諾し電話を切った。

柊園は父親からの電話を切ると ”メールに音楽・・・か・・・” と呟いたそのとき柊園の脳裏に滝川医師から聞かされたメロディーがよみがえった。 ”まてよ・・・あの曲以前どこかで聞いた気がするぞ！” もみあげを触りながら考え込む柊園警部補・・・食べかけのカップメンはすでに冷めてしまっていた。

柊園のもみあげを触る手の動きがピタリと止まる。 ”そうだ！ かすみが出ていたDVDだ！ 三人が絡み合うその後ろで小さな音で流

れていた・・・あの曲だ!”

(な)

「おいおい君、何処に行くんだ。もう、この時間は立ち入り禁止だぞ。」

高層ビルに入って行こうとしている男に、警備員は声をかけた。

男は胸ポケットから、警察手帳を取り出し「捜査で屋上まで。」と言ってにっこり笑った。

向井は屋上に出た。

子供の頃、ウルトラマンの再放送をTVで見てファンになり、悪い怪獣をやっつける為、彼は刑事に成ろうと子供心に誓った。

もう、秋も深まり風は冷たかった。

”俺は、悪い奴は許さない” 向井は深夜の屋上で心に誓った。

向井は、目の前にある金網をいとも簡単に乗り越えた。

もう、向井の前に障害物はない。夜空には、三日月が美しく輝いていた。

” 綺麗だ・・・ ” 向井は呟いた。

(何をしているんだ、向井!) 向井の頭の中に、柊園警部補の声が

こだました。

”俺は、ウルトラマンに成って悪い奴を遣っ付けてやるんだ!”

向井は杓園の声を打ち消した。

胸の内ポケットに手をやり、ベーターカプセル（携帯）を取り出し、頭上に掲げた。

「シュワッチ・・・!」

向井は思いつ切り、高層ビルの屋上から宙に舞った・・・。

”俺は、ウルトラマンだ・・・・・・・・!!”

杓園は夢を見ていた。

凶悪犯を向井と追いかけていた。

相手は、一家4人を皆殺しにして金を奪って逃走した強盗殺人犯だ。

その犯人を、高層ビルの屋上に追い詰めていた。

「俺にまかして下さい」そう言って向井は犯人の前に立った。

「危ない! 奴は弾き（ハジキ）を持っているぞ・・・」杓園は絶叫した。

向井は胸ポケットから何かを取り出し頭上にかかげた。

その瞬間向井はウルトラマンに変身して、あっという間に犯人を失神させていた。

柊園はその光景を唖然として見ていた。向井のウルトラマンは柊園に敬礼をして、宇宙に飛び去って行った。

「向井が・・・ウルトラマンだったのか?!」

その時、柊園の携帯が鳴った・・・・・・・・・・。

・・♪・・・・・・・・。

携帯が鳴っている、柊園は寝ぼけ眼で携帯を取った。

「ハイ・・・柊園・・・。あっ本部長ですか?! えっ、向井があの高層ビルから飛び降りて・・・・・・・・?!」

「宇宙に還った・・・?!」柊園はまだ寝ぼけていた。

「何を訳の分からない事を言っている、向井があの高層ビルから飛び降りて死んだんだ!」

柊園は飛び起きて携帯に向かって大声で叫んだ。

「今すぐに行きます!!」

時計の針は午前二時を少し過ぎたところを、指していた。

柊園が現場の高層ビルに到着したのは、午前三時を少しまわっていた。

もう向井の遺体は警察病院に運ばれたみたいで、忙しく警官たちが動き回っている。

野次馬をかき分け、佐古田警部を見つけた柊園は声をかけた。

「警部・・・いったいどう云う事ですか?!」

「まっさん（柊園）か!・・・向井がこのビルから飛び降りた、警備員の話ではどうやら自殺らしい。」

「そんな馬鹿な! 奴に限って自殺などあり得ない・・・。」

かみつかんばかりの柊園に、佐古田は薄笑いを浮かべながら言った。

「警備員がすべてを見ていたんだ。」　そこで、佐古田は一度言葉を切り、次のように続けた。

「深夜に刑事だと言って屋上に上がった若い男を不審に思い、後をつけて一部始終を見ていたそうだ・・・まっさん、残念ながら向井は自殺だ。」

”違う・・・向井は何かをつかんでいた。これは、巧妙に仕組まれた殺人だ。俺が、いずれ真相を暴いてやる。”

そこで、柊園は天空を見つめて呟いた。　「ウルトラマン、これ

からも一緒だ・・・」

佐古田警部は不思議そうに、柊園の横顔を凝視し続けていた・・・。

(ゴ)

再び同じ高層ビルからの飛び降り自殺?・・・

かすみと秋葉　剛は同じビルから同じ時間にダイビング!

しかし時間こそ違い同じビルからのダイビング。

今度は柊園警部の部下向井直哉が謎の飛び降り・・・

向井直哉の婚約者並木　恵が最後に見たのと言うより別れたのは
10月16日。

そして再び変わり果てた姿と対面したのはその5日後の今日10月
21日・・・

並木　恵が朝起きて歯磨きをしながら時計代わりにダイニングキッ
チンのテレビをつけると飛び降り自殺か??　なんて言うニュースが
入って来た。

「最近は良くあるわね!・・・」

なんて音だけ聞きながら後ろ向きで歯を磨いていると・・・

”本庁勤務の若い刑事、名前は向井直哉・・・”と聞いて持った
コップを流し台の下に落として　「がちゃん!」・・・　ま

さかと思ってテレビの画面を見ると顔写真が映ってる！！

場所は本庁所属の警察病院の手術室の手術台の上・

何か薬物を飲んで居ないかとこれから司法解剖が始まろうとしている！！

並木 恵は朝食どころではないと、とるものもとあいずそそくさと急いで身支度を済ませるとタクシーを呼んで警察病院へと急いだ・

「なんで～～！！・・・なぜ??・・・」

言葉にならず恥も外聞もなく遺体にすがって泣き叫ぶ並木 恵・
柊園警部も他の刑事達や医師達は二人に背を向けて窓際に立ち目頭を押さえている！！

(ズ)

加島礼子はDVDプレイヤーの再生ボタンを押した！

テレビ画面に自分自身の姿が映し出された・・・ベットの上一糸纏わぬ姿で身じろぎもせず天井を見つめている。

やがて二人の男が現れ、礼子の上に覆いかぶさるようにのしかかった。

・
礼子の意思とは関係なく、男達はなすがままにいたぶり続ける・・・

礼子はあるふれ出る涙を拭おうともせず、テレビ画面の前でワナワナと震えるばかりであった！

さかのぼること数年前……

礼子は”かすみ” がうらやましかった！”かすみ” が入社してくるまでは、礼子は職場の男性たちの憧れ、マドンナ的存在であった。しかし”かすみ” が入社して以来、マドンナの席はアツというまに”かすみ” のものとなった。

”かすみ” とは対照的に礼子は影の薄い存在となっていたのである。

いつも周りからちやほやされる”かすみ” の姿を唇をかみ締め、遠くから見つめるだけだった。

休みの日でも”かすみ” は来栖健二とデートを重ねる日々。

礼子には田舎の病院に直る見込みのない病気で入院しているたった一人の母がいる。そのため収入のほとんどが母の入院費で消えてしまう！

礼子は思った、”かすみ” のようにおしゃれがしたい！”かすみ” ように素敵な彼氏がほしい。”かすみ” ように……”かすみ” ように……

礼子の母は女手一つで礼子を大学まで行かせてくれた。しかし礼子が大学を卒業し、就職が決った年に脳梗塞で倒れてしまい、意識の戻らぬまま延命措置を施す事となった！

だが、それには莫大な費用がかかる、礼子は会社でも前借りが重なり一人頭を抱えていたとき、事情を知ったかすみが同居を持ちかけてきた。

同居する事で家賃はもちろん、光熱費や食費の負担が軽減されるとの考えからの申し出であった。

礼子のかすみの優しさが有り難かった。

礼子のかすみの手を取り大粒の涙を流しコクリと頷いた、こうして二人の共同生活が始まったのである！

しかし、時はすでに遅く、礼子の借金は大きく膨らんでいた。そんな時、街角の小さな貼り紙が目にとまった。

” 消費者金融 富士見ローン ”

富士見ローンは、暴力団富士見会が経営する悪徳金融であった、若い女性相手に高額な利息で金を貸し、支払えなければビデオ出演させる。

時には売春さえ強要される！

礼子はそのチラシに導かれるようにドアを開いてしまったのである。礼子にとって、そこはまさに地獄への入り口であった！

礼子の借金は日を追うごとに膨れ上がり、身も心もボロボロに疲れ果てていた。

それでも ” かすみ ” の前では精一杯明るく振舞っていた、でも一人になると涙があふれてくる ” もうどうでもいい・・・このまま

死んでしまおうか・・・” 礼子は、何日も部屋の中で膝を抱え食事さえろくにとらない日々が続いた。

そして、そんなある日のこと、礼子の携帯に叔母からの連絡が入った。

叔母は礼子の母の妹であり、付き添いを自らかつてでてくれていた。「礼ちゃん！お母さんがたった今・・・」電話の声は涙でつまった！

礼子が駆け付けつけると母の顔には白い布がかけられていた。「お母さん！！ 側にいられなくて ごめんね」 礼子は溢れ出る涙と脱力感でその場に崩れおちた。

二人は抱き合い、何もかも忘れ大声で泣いた！
しかし、礼子は気づいていた心の奥でホッと胸を撫で下ろす自分がいたことを。

そして葬儀も終わり、礼子は墓前に黄色い花を供えた。

それは母の好きだった花・・・名前さえ知らない花・・・

子供のころ礼子は母に手を引かれ花畑に行くのが好きだった。そんな時、母はいつもこの花を指差し「かあさんはねえ、この小さな黄色い花が大好きなのよ」と礼子の頭をなでてくれた。礼子が「ふーん！ このお花、なんて名前？」とたずねると、母は花びらをそっとつまみ「名前なんか知らない・・・名前なんかなくてもきれいに咲いてるじゃない！ 元気に、誇らしげに・・・かあさんは礼子にもこの花のように生きてもらいたいの！」

母のそんな言葉を思い出し、礼子は唇をかみ締めた。

参列者に挨拶を済ませ、東京への帰り支度をしていたとき、礼子は叔母に呼び止められた。

叔母は大きな封筒をさしだしながら 「これはお母さんの生命保険の証書と預金通帳です。」

礼子は驚きながらも中を確認した。 保険は死亡時のみ支払われる少額ものだったが、それでも礼子の借金はすべて補うことができる。

・・・そして、数日後

借金を返済した礼子は、秋葉を呼び出した！

眉間にシワをよせ、不信げに見つめる秋葉に、礼子は言った。

「実は、私・・・あなたの事が好きになったんです！」

(な)

夕飯の支度をしながら、増野圭子はチラッと柱時計を見た。

もう五時半・・・優斗まだ公園にいるのかしら？！”

圭子は小学三年生の我が子の身を案じていた。この頃変質者がこの辺りにも出没していて、小学校からの連絡簿にも毎日のように、注意をするように書かれていた。

圭子は造りかけていたシチューの火を止め、近くの公園へと急いだ。

自宅から五分程に、その住宅街の公園はあった。あまり広くはなく鉄棒にすべり台、そしてすべり台の下にこじんまりとした砂場があるだけだ。

「ママーッ。」 鉄棒をしていた4〜5人の子供の中から、優斗が圭子の元へ走って来た。

圭子は優斗を抱きながら、頭を軽く小突きながら言った。

「いつまで遊んでいるのよ・・・もう五時半を過ぎてるわよ。」

「だって・・・すべり台が出来ないんだもの。」 優斗はすべり台を指差した。

圭子はすべり台を見た。 なるほど、中年の男性らしき人物がすべり台に座りこちらを見ている。 もう周りは薄暗くなっていてその表情までは分からないが、何かの不自然さを圭子は感じた。

「いつからいるの？」 「僕が来た時からあの恰好でいるよ。」

「変質者かしら・・・」 圭子は呟くと、恐る恐るすべり台に近づいて行った。

「ぎゃーッ○X△・・・」 悲鳴とも奇声ともつかない声をあげ、圭子はその場にしゃがみこんだ。

そのすべり台に座っている中年の男は、身体は正面の方に向き、顔は真反対の階段の方に向いていた。

圭子の声の振動で、男の首が階段をつつたて圭子の前に転がり落ちて来た・・・。

その後の、警察の調べで身元は
免許証から、暴力団”富士見会”幹部 岸田杜雄（48）と判明した。

尚、その切断された顔の口の中からは、”天罰”と書かれていた紙切れが発見された。

大都会の閑静な住宅街の公園で起こった猟奇殺人事件は、日本中を震撼させていた。

この事件を、一応仕切る事に成った佐古田警部は、もじやもじやの髪の毛を掻きむしった。

被害者は後ろから鋭利な刃物で心臓を一突きされており、ほぼ即死状態。

死後首を切断したと思われる。尚、口の中に入っていた紙はパソコンで作成されたものとみられる。

死亡推定時刻は、死体が発見された日の午前五時から九時という事。そして、何所か別の場所で殺害され、あの公園のすべり台の上に午後二時から四時の間に、発見された格好で置かれたという事が、今までの調べで分かった。

佐古田は頭を抱えた・・・。

なぜ、犯人は首から上を切断したんだ。

なぜ、犯人は危険を冒してまで、死体を白昼公園に運んだんだ。

なぜ、犯人は死体をすべり台の上にあの恰好で置いたんだ。

なぜ・・・なぜ・・・なぜ・・・。

その頃、死体が発見された公園のすべり台の上に立って、一人の男が、死体の顔が覗いていた方角を見つめていた。

公園の街路樹の隙間から、メゾン・ド・ソレイユと書いた建物がはるか向こうにそびえ建っているのを、男の目が捉えていた。

その男、柊園はすべり台から降りると、小さくうなづき、もみあげをしきりに触り続けていた・・・。

(ズ)

秋葉 剛と加島礼子が付き合い初めて一ヶ月すぎた。

礼子のかすみに 「実は私ね・・・彼氏がいるの・・・今夜は帰らないけど心配しないで！」と告げると、”かすみ”はまるで自分の事のように喜び送り出してくれた。

秋葉のマンションで朝を迎えた礼子が目をさますと、秋葉はすでに起き出し札束を数えていた。礼子は 「早いのね！」 とベッドから立ち上がりカーテンを開ける。

礼子が秋葉の方に近づきながら 「どうしたのそのお金」 と訪ねると秋葉は、 「バカな女はお前だけじゃないのさ・・・そのバカ達が主演したDVDの売上金だ！」

秋葉は数え終えた札束をカバンに詰めている！ その姿を黙って見つめる礼子の目には憎悪と殺意に満ちていた。 ”私がバカな女ですって・・・フン！ 私はあんたを許さない・・・ぜったいに・・・！”

それは、復讐劇の始まりであつた。

第5部・私は、来栖です（前書き）

ズラえもん・ながいわれ・ゴジラ 三人の共作です。
（ ）の中は作者の頭文字です。

第5部・私は、来栖です

(ズ)

現在へ

男は、住所が書かれたメモを片手にコンビニの角をまがった。そこには洋風で白を基調とした洒落たアパートが建っていた。

男はアパートを見上げた、そこには ”メゾン・ド・ソレイユ” と書かれていた！

階段を登り303号室の呼び鈴を押すと中から若い女性が現れた。
加島礼子である！

礼子は男を招き入れると「滝川先生わざわざ来ていただいて申し訳ありません、先生の病院では話し辛かったもので・・・」

滝川医師はニコリと笑うと「いやいや、君と会うのは久しぶりだし、この前はろくに話しもしないまま帰ってしまうし・・・私も気になってたんだ」

礼子はお茶を入れ、滝川に差しだしながら 「実は私・・・」 とうつむいた。

滝川医師は首を左右に振りながら 「わかってる・・・君は私の誘導自己暗示を使いましたね！」 と、カバンから一枚のCDを取り出した！

滝川医師は 「ついさっき。」 かすみさんの父親から警察宛てに届いたものだ・・・私のところへ柘園警部補からの鑑定以来だといって婦警さんが届けにきた！ 鑑定結果はすでに伝えてある。」

礼子は涙声になり 「先生・・・ごめんなさい・・・私先生の大切な研究を・・・」

滝川は礼子の肩をそっとたたくと 「いいんだよ！でもこれでは人はコントロールできない、これはたぶん君が誘導自己暗示のテスト用に作ったものだね」

礼子はだまってうなづいた。そして 「それは確かに先生の言われるとおり私がテストのために作ってパソコンに保存していたものです、それを かすみ聞いてベースにしている音楽が気に入ったらしく、メールで自分の携帯に送ったんです・・・私はそれに気づき、かすみが寝ている隙に彼女の携帯から削除したのですが、かすみは携帯を2台持っていたらしくて、そちらのほうに残ってしまっただけです」 と涙を拭いた。

滝川医師は 「では かすみさんはやはり自殺なのですか？」

礼子は ”コクリ” とうなづき 「かすみは自殺だと思います・・・でも、殺されたも同然なんです！」

礼子は続けた

「私は かすみから来栖が二重人格だと聞かされました。でも信じる事ができなかったの、二人のデートの後をつけたんです・・・しばらくたって二人はもめ始めました。そっと耳を澄まして聞いてると かすみと別れ話を切り出したのです。来栖の二重人格の現れ方が頻繁になったことが原因のようです！しばらく かすみのすすり泣く声が聞こえてました・・・」

その直後、私は自分の目を疑いました！ 来栖の顔がまるで鬼のようになり、かすみを殴りつけたのです」

滝川医師は握りこぶしを口元に当てながら 「それで自殺を・・・」

滝川の言葉に礼子は首を振り 「いいえ！問題はその後です・・・
気を失った かすみの顔を覗き込んだ鬼のような来栖は、携帯を手
にしどこかに電話をしました！ やがて一人男が車で駆けつけ、来
栖にお金を払いました・・・金額はよくわかりません。 男はかす
みを車に押し込むと走り去りました。 私は怖くて急いでその場を
逃げ出しました！ その次の日です、私はある男からDVDを見
せられました・・・そこには二人の男から辱めをうける” かすみ”
の姿が映っていました！」

すすり泣く礼子・・・

滝川医師は冷めてしまったお茶を一口飲むと 「うん！なるほど・
・たしかに若い女性が信じていた恋人にそんな形で裏切られると死
を選ぶのも無理はない・・・かわいそうに、さぞつらかったと
思います！

・・・

しばらくの沈黙の後、滝川医師が口を開いた。 「さっき君の話の
中に出てきた ” ある男 ” ・ ・ その男に君は誘導自己暗示を仕掛け
たんですね！」

礼子は無言でうなずくと、隣の部屋からノートパソコンを持ってき
て滝川の前で開いた。 カーソルを操りドキュメントフォルダー
を開く・・・そこには音楽ファイル特有のアイコンが現れた！

礼子は 「これがその時のデータです！」 と滝川の方にモニタ

ーを向けた。

滝川は音声分析ソフトを使い、分析を始めた。

心安らぐようなBGMに重ねるように礼子の声が入っている。

”死にたくなる　死は幸せを呼ぶ　フェンスを超えて夜空に飛び出せ……”

死に導くためのいくつもの単語が繰り返されてる。

そしてそれを何度か繰り返した後、今度は男の声で　”お前死ねえ！”　と記録されていた！

礼子は言った。「これをCDにして秋葉の製作するDVDのBGMに流させるように仕組んだんです！　私はあの男が製作現場に必ず同席していることを知ってましたから・そうすることで何度も繰り返しあいつに聞かせることができたんです！」

滝川は　「うん！　しかし潜在意識に蓄積された自殺へのプログラムの起動させるのは、此処に収録されている　”お前死ねえ！”　のキーワードをターゲットの目の前でこの声の主に言わせる必要がある……それがなければ効果がないはずだが……？」

礼子は滝川の目を見つめ　「はい！　”お前死ねえ！”　の言葉を必ず発する人物を知っていました！　これもその人物の発した声をこっそり録音したものです。」

(ゴ)

早いものであれからもう18日が経った。

いつもは仕事が終わると駅前の赤提灯で一杯やって公園のベンチで一休みして酔いを冷ました後終電に乗ってねぐらに帰る来栖であったけど

今日はいつもより終電の一つ前の電車に乗って花園町に途中下車した・・・

目的は駅前のフラワーショップに寄って花を買う為だった。

切花を見繕って手ごろな花束にして電車沿いの道路を歩き出した・・・

あるビルを目標にして歩いて行くと目的のビルの足元で蹲って花を添えて手を合わせているピンクのコートを着た女性が居た。

来栖 「こんばんは!・・・」

その女性は並木 恵、あの飛び降り自殺した若い刑事向井の婚約者だった・・・

並木 「貴方も誰かのお参りに?・・・」

来栖 「今月6日の夜このビルの屋上から飛び降り自殺した元勤めていた会社の後輩の女性のお参りに来たのです・・・」

並木 「あ、あのかすみさんとか言う女の人ですね?・・・私は婚

約者だった刑事の向井の供養に来たのです・・・」

来栖 「そうだったのですか！・・・来栖と言います・・・」

並木 「私は並木 恵と言います」

来栖 「前に勤めて居た会社がバブルが弾けて不景気が来たかと思えば今度はあの忘れもしない9、11同時多発テロで、商事会社の扱い品目が減って来て遂に人員整理で早い話がクビでかすみとは別れ別れ・・・」

並木 「そうだったのですか？・・・」

しばらく沈黙が続いた後・・・

並木 「良かったらその食堂でお茶を飲みながら話の続きをしませんか？？」

誘われるままに来栖と並木 恵は食堂へ入って行った・・・

(な)

「・・・と、言う訳で向井直哉巡查の件は、個人的な理由での自殺と断定し、殉職とは認めない。」

柊園の頭の中で、新藤警視の言った言葉がやまびこのように木霊していた。

”確かに状況だけを考えれば自殺にしか見えない。しかし、俺には向井が自殺するなんて思えない。来月に結婚を控えた男が、なぜ

自殺なんだ・・・。”

向井は司法解剖の結果ドグマチールという薬物が検出されたが、身投げとの因果関係は分からなかった。

それに、2人の飛び降り自殺(?)以来警備が厳重になっており、警備員が向井の飛び降りるのを一部始終目撃している。

”絶対に何かある、向井は何かを掴んでいた。そして、何らかの方法で、犯人に殺されたのだ。”

柊園は諦め切れなかった。

公園で発見された死体の写真を見た時、あのDVDに秋葉と一緒に映っていた男だと判った。

”飛び降り事件と、猟奇殺人は絶対繋がりがある。”

柊園はそれ以来、捜査本部とは別に独自の捜査をしている。

捜査一課 中村課長も、まだ目を瞑っていてくれた。

柊園は公園を出て、メゾン・ド・ソレイユ 303号室の前にたた・・・。

「おや?!、誰か来たみたいですね・・・。」 滝川医師が呟いた。

礼子は涙を拭いながら、滝川医師の方を見てにっこり笑って立ち上がると、「はーい」と言って礼子は玄関へと急いだ。

（「俺は・・・ウルトラマン・・・か・・・」）

礼子は振り向いて滝川医師を見た。 「何か・・・？」

「あっ・・・いやなんでもない！・・・チャイムが鳴ってるぞ！」

礼子は首を傾げ玄関へと急いだ・・・。

（ズ）

礼子がドアを開けると、そこには柊園警部補が立っていた。

柊園が警察手帳を見せると、礼子は 「お待ちしてました。」と部屋へ招き入れた。

柊園はポケットから一通の封書を取り出すと 「これはあなたが私宛に送ったものですね？」

礼子は 「はい！それが かすみと秋葉の死の真相です。たった今、滝川先生にも話しました。」

礼子は涙でつまりながら柊園もう一度一連の出来事を話した！

柊園は開いていた手帳をパタンと閉じると「なるほど・・・よくわかりました・・・ちょっとわからないのは、かすみさんが公園で来栖と別れ話をしましたね？それは

かすみさんが亡くなるどのくらい前の話ですか？」

礼子は 「10日ほど前だったと思います、その後来栖は かすみ

の前から姿をくらませました！私は ” かすみ” がかわいそうで、その間時間があると来栖の行方を捜してたんです・・・そしてやっと見つけて、あとをつけて・・・でもその時すでに” かすみ” は・・・」と肩を震わせた。

柊園はもみ上げを撫でながら 「うん・・・！ では、秋葉は来栖と面識があつたんですね？」

礼子は左右に首を降りながら「いいえ！会った事はないはずです。」

柊園は 「だとすると・・・秋葉はいつどこで ” お前死ねえ” というキーワードを耳にしたのでしょうかねえ！」

柊園の言葉に滝川が口を開いた！

「それは私が証言しましょう！ 秋葉が飛び降りた夜、榊原診療所の裏通りで喧嘩があつたのを宿直の看護婦が窓から目撃したと言っていました。一方的に殴られ、のびたはずの男が突然立ち上がり ” お前死ねえ！” と叫んだとたん、相手の男が倒れたそうです。目撃した看護婦が ” まるでカンフー映画のようだった” と、興奮しながら話してくれました。その二人が来栖と秋葉だったのだと私は思います！」

柊園は 「うーん！ 滝川先生・・・彼女の誘導自己暗示で秋葉が自殺した・・・この場合彼女が殺したのだと断言できますか？」

滝川はワナワナと震える礼子の肩を抱きながら 「いえ！誘導自己暗示は人によって効果の現れ方が違います！中にはまったく効果

が得られない場合さえあります。」

柊園は大きくうなづく。「秋葉は自殺で間違いない！ 礼子さん、あなたには関係のない出来事だったんです」

柊園はそう言い残しメゾン・ド・ソレイユを後にした。

柊園の座っていたところには、礼子が柊園に宛てた手紙がビリビリと引き裂かれて置かれていた！

(な)

「じゃあ、また何かあったら連絡をしてくれ」 滝川は礼子の部屋を出ると大きく背伸びをした。

「滝川さん、一寸いいですか?!」 駅のほうに歩いていた滝川に柊園が声をかけて来た。

滝川はちよつと驚いた顔になったが、ニツコリ笑って、「じゃあ歩きながら話しましょう。」と言った。

柊園は滝川に並んで歩きながら、しきりに揉み上げを触っている。

「実はですね先生・・・先程の加島さんの話だと、少しおかしい事になるのですよ。」

「えっ・・・」 滝川は思わず立ち止まり柊園の顔を見た。

柊園も立ち止まり滝川の方に向き直った。

「私の部下に向井と云う刑事が居たんですよ・・・」 「あの、飛び降り自殺した」

「警察発表では自殺として処理しましたが・・・。」 「・・・違うのですか？」

枅園は揉み上げをいじりながら滝川の目を見つめ、「彼は来月結婚を控えていたんです。あの日非番で彼女とデートをしていて、加島礼子を見つけ彼女を置いてけぼりにして後を付けたそうです。」

滝川の顔が少し動揺したように思えた。

「その夜、向井から私に電話がありました。向坂と秋葉は自殺では無いと・・・大変な事を掴んだからもう少し調べて、明日署ではなすと・・・その深夜、向井は同じビルから飛び降りたのです・・・私には自殺とは思えません」

「足を滑らせての転落事故では・・・？」 「2人はまた歩き出していた。」

「警備員が全てを見ていたそうです。あっという間に金網を乗り越えて、胸ポケットから取り出した携帯を夜空に掲げ」 シュワツチ ” という声と共に飛び降り・・・まるで、ウルトラマン見たいだったと・・・。」

枅園は滝川を見た。滝川は黙っていた。

枅園はしゃべり続けた。「加島が向井に秘密を暴かれ、” 自己暗示」で秋葉のように仕向けたのなら話は分かるのです。」

「た・・確かにおかしいですね。」

2人は暫くの間黙った。

「先生、貴方も出来るのですよね・・・・・!?。」

ながい沈黙が、二人を支配した・・・駅に着き滝川は、柊園に明日の午後二時に病院で待っていると言って逃げるように、駅の人混みに消えて行った・・・・・。

(な)

「まっさん（柊園）そういう事だ、明日ゆっくり休んで、明後日から猟奇殺人の捜査にまわってくれ！」 中村課長はそう言うと言草に火を付けた。

「・・・・・分かりました。しかし、明日私が自殺したら滝川秀治の身柄確保と加島礼子の身辺警護をお願いします。」

「分かった・・判った。とにかく今日は早く帰ってゆっくり休め・・・！」

「課長！私は冗談で・・・。」

「分かっている・・ひつこいぞ！」 そう言って、中村課長は捜査一課から出て行った。

柊園は警察署の玄関を出た。

大都会に夜が音も無く忍び寄って来ていた。

”向井・・・俺は、お前の無念をきつと晴らしてやるからな・・・！”

枅園は心に誓い、家路へと急いだ。

並木 恵が、来栖と会うのはあの日以来二度目である。

午後六時上野公園の”西郷どん”の前で待ち合わせをしたのである。
なけなしの一万円札を握りしめた来栖が、恵に気づいて走って来ていた。

都内にあるカラオケボックスで、二人はお互いの傷ついた心を癒し合っていた。

恵はともかく、来栖は恵に淡い恋心を抱いていた。

「♪女房みたいに、ぬれた手を拭いて♪」 恵が歌い、来栖が生ビールを飲んでいる。

「♪あなた・・・迎え・・・ドアを・・・。」 向井の優しくった笑顔が、恵のほほを濡らした。

そんな恵の肩を来栖が優しく抱いた。

「いやあ」 恵はおもわず来栖を突き飛ばした。

酔って居た事もあり、来栖はテーブルの角に頭をぶつけ動かなくな
った。

「大丈夫？ 来栖さん・・・」心配そうに恵は言った。

来栖は、何事もなかったかのように”スッ”と立ち上がり、恵を
一瞥してニヤツと笑った。

「今度の獲物は、この女ですか?!・・・来栖さん。」

恵は来栖の豹変とも思える態度に呆然と立ちすくしていた。

「私は、来須です。」 来栖(?)は言って、獰猛な笑みをその唇
に浮かべた・・・。

第6部・五色系の伝説（前書き）

ズラえもん・ながいわれ・ゴジラ 三人の共作です。
（ ）の中は作者の頭文字です。

第6部・五色糸の伝説

(な)

「生ビールをお持ちしました・・・。」

カラオケボックスのドアが開いて従業員が入って来た。

年の頃は二十歳前後、色白の可愛い娘だ。

恵は来須の一瞬の隙について、素早くドアの外へ飛び出した。

「な・・・何をするんです・・・キャアッ!!」何か割れる音がして、先程の従業員の娘の叫び声カラオケボックス中に響いた。

近くの部屋のドアが開いて、カラオケ客たちが何事かと出てきた。

恵は茫然として自分がいた部屋を見ていた。「どうしたんです。」

「何かあったのですか?!」他の客が恵を見て言った。

「何だ、今の悲鳴は・・・」 「どうした。」 「どうした」次々とカラオケ客が集まって来た。

その時である、部屋のドアが乱暴に開いて来須が上半身を出しニヤリと笑うと部屋の外に出た。

右手に先程の娘の足を持っている。娘はどうやら気を失って無抵抗の状態でひこずられている。

一瞬！誰もが押し黙り静寂があたりを支配した。

「ほんとに何も覚えてないのです。」と来栖は蚊の鳴くような声で言った。

佐古田警部は、モジャモジャの頭を手で掻きまわしながら調書に書き込んでいた。

あれから、駆け付けた警官により来須は逮捕された。その際、軽傷の警官が二人、鼻の骨を折られたのが一人。そして、従業員が頭部陥没骨折で全治一ヶ月の重症である。

「お前なあ、もう一人の自分がやったなんて信じれるか・・・？」佐古田は呆れ顔で言った。

「・・・・・・・・・・」 「今度はだんまりか・・・」佐古田はため息をついた。

「どちらにせよ、今日は帰れないぞ！」

佐古田はそう言うと言席を立ち、窓の側に行き夜空を見上げた。

大都会の夜が、無能な警察をあざ笑ってるかのように、佐古田は思えてならなかった。

「どうした、佐古ちゃん？！」

来栖の取り調べが、ひと段落ついて

自分の机で頭を抱えている佐古田に中村課長は聞いた。

「この頃いやな事件ばかりで・・・。」力なく佐古田は答えた。

その時捜査一課のドアが開いて、小林刑事が行きよいよく飛び込んできた。

「警部・・・目撃者が現れました。あの公園の近くに住む主婦何ですが、不審な人物を目撃してます。」

「何、詳しく教えろ！」 佐古田は色めき立った。

「はい」小林は手帳を取り出し、パラパラとめくりながら、「あの死体が発見された日の午後三時過ぎ頃、自宅の家の二階から、ボストンバックを持った不審な人物を見えます。」と手帳を見ながら言った。

「どんな男だ・・・！」横から中村課長が声を出した。

小林は、中村課長の方に向いて「女です。」と答えた。

「何、女だと・・・?!」と、佐古田。

「はい、黒いコートを着てサングラスをかけた・・・女だそうです。」

小林刑事は一息つき。

「その女が重そうなボストンバックを抱えながら、公園の方に歩いて行ったそうです。」

「よし、明日モニタージュだ。」

「明日午前中に来てくれる約束をとっています。」　そう言って、小林刑事はニツコリ笑った。

(ズ)

青木雪乃婦警は、自分のデスクに向けデジカメを構えていた。

そこには落とし物箱から取り出された様々の物が、1つ1つに拾われた日付と場所が記入された札が付けられ並べられている・・・！

その姿を見た先輩で主任格の婦警が感心したように　「雪乃さん、もしかして、落とし物のリストを作って掲示板に貼り出すつもり・・・！あんたマメねえ。」と目を丸くした。

主任は青木のデスクの上に黒いファイルを見つけ　「それより雪乃さん！このファイルとCDはなんなの？」と指差した。

青木婦警は「見つかったちゃいましたか！これは浮浪者暴行事件と連続自殺事件・・・それと、この前の首切り死体事件・・・今までにわかったことや、それらに関係した人物など・・・私にはこれらがすべてつながりがあるような気がして独自に情報を集めてるんです！　実は私・・・刑事志望なんです！」と大きな目をクリクリと動かした。

主任は　「ちょっと冗談やめてよ！そんな危ない・・・そんなことしてあなたにもしものことがあったら私だって知らないじゃ済まなくなるんだからね！」

青木婦警は　「わかってます！無茶はしませんから」と笑って見せ

たのだった。

翌日、非番の休日を利用し青木雪乃婦警は臨港苑へと来ていた。

臨港苑・・・その朽ちかけた佇まいに雪乃は思わずつぶやいた”
こ・これがアパート”雪乃はおそろおそろ中に入っていた。

入り口のドアを入れて正面には廊下が伸びている・・・一番手前右側は食堂の跡らしい、6客ほどのテーブルと椅子の残骸が散乱している！

廊下を奥に進み周りを見回してみる・・・部屋は全部で8部屋あるようだ。

電気は来ているらしい、廊下の突き当りには裸電球がぼんやりと灯って見える！

”たしか、左の二つ目の部屋のはず”雪乃は部屋の割れたガラスの隙間から中をそっと覗いてみる・・・そこには数枚の毛布と酒の空き瓶らしきもの・・・あとは、古ぼけたテレビが一つ・・・人の気配はない。

雪乃は”ほっ！”とため息をついた。雪乃には自分の心臓が、まるで耳元にあるのではないかと思われるほど鼓動の音が大きく聞こえていた！

そのとき「青木君！」と、後ろから声をかけてきた者がいた。

「\$%\$&・・・！」雪乃は叫びともつかない声を出しその場にしりもちをついた。そばに立てかけてあった自転車ガ、ガシャンと大きな音をたて倒れた。

雪乃は口元に手を当て、大きな目をクリクリと動かし声の主を見て再び驚きの声を上げた。「ま・・・柊園警部補！」

柊園は、腰を抜かしたように座り込む雪乃に「君はこんなところで何をしてるんだね」と手を差し伸べた！

柊園に手をひかれるように臨港苑を出た青木雪乃婦警は、普段見せたことがないジャージ姿の柊園に「柊園警部補！どうしてこんなところへ？」と大きな目をさらに大きくして柊園を見た。

柊園は雪乃から目をそらせ「私は・・・その・・・慣れない休日をもてあましてしまって・・・それより君こそ何をしていたんだ？」

雪乃は「私は・・・来栖健二の行方を・・・」

柊園はもみあげを撫でながら「だろうな！私も似たようなものだ・・・しかし、何で興味を持ったのかは知らんが・・・君は関わりないほうがいい、今すぐ家に帰って集めた資料を処分しなさい！君が一連の事件に興味を持って深入りしそうだ、君の上司が私のところに連絡をくれた。」

雪乃は参ったとばかりに頭を掻いた「もう！主任さんたらおしゃべりなんだから・・・しかたがない、今日の捜査はやめにして柊園警部補とデートにしますか」と大きな目をクリクリと動かしながらいいたずらっぽく笑った！

雪乃は渋る柊園を半ば強引にハンバーガーショップへと誘った！セットメニューを注文し席につくと、柊園はややうつむき気味で「青木君！こういう店は私には合わんだろう・・・」と辺りを気にしながら、もみあげを触った。

雪乃は　ウフフ！と笑いながら　「どうしてですか？　周りはみんなカップル、私達もカップルだし・・・何も違和感はないとおもいますけど！　なんなら、コーラのストロー二本にしてもらいましょうか？」

若い娘と顔を寄せ、1つのコーラを飲む自分の姿を想像した柾園は
“エヘン”とひとつ咳払いをし、あわてて眉間にしわを寄せた。

にこやかに柾園を見つめる雪乃の表情が、次第に真顔へと変わっていった。

そして　「警部補！」　五色系の伝説”てご存知ですか？」とたずねた。

柾園は見たことのない雪乃の表情に戸惑いながら　「い・いや！　聞いたことはないが・・・」と、雪乃のほうに向き直った。

雪乃は持っていたファイルを開き　「五色系とは、来栖健二の生まれた岡山の山村での風習です。この話はそのお寺の住職から聞いた話で、出産直前の妊婦が寺に出向き、生まれて来る我が子のために、人間の持つ五感を表す五色の糸を受け取るというものです！　住職が木箱の中に用意した複数の糸の中から5本の糸を妊婦が自ら抜き取り護符とともにお守りの中へ納めるのだそうです。　村の言い伝えでは、この糸が何かの間違いで1本多くなった場合・・・人間を超越した神のような能力を持つとも、悪魔の力を身につけるとも言われてるそうです。　そのお守りは本来両親が大切に保管することになってるけど、来栖の両親は彼が19のとき不慮の事故で亡くなっており、そのお守りは住職のもとにありました！　住職が中を

確認したら6本の糸が入っていたということです！なぜ6本になっていたのかは先代の住職が亡くなっている為、原因はわからないそうです。」

柊園は腕を組み黙って聞いていたが「うーん！しかしそれが来栖の二重人格の裏づけのはならんだろう！」とコーラのカップに手を伸ばした。

(ズ)

コーラを口元に運ぶ柊園に雪乃はつづけた。

「それだけではないのです！ 実は来栖健二はもう一人の女の子と頭部が結合した“結合双生児”として生まれたのです！ しかし、生まれ出てすぐ女の子の方は息を引き取り、男の子の方を生かすため分離手術が行われました・・・でも脳の一部が癒着していて・・・そのとき女の子の脳はほとんど成長しておらず、本来の5分の1ほどのサイズだったため、女の子の脳を切除することなく男の子の頭蓋骨に収めました。しかし、そんな状態の赤ん坊が当たり前前に生きられるとは、担当医も両親も思っていないませんでした！ 授かったわが子を一日でも長くその手に抱いていたという切実な両親の願いから行われた手術だったのです！ 警部補もご存知のとおり来栖は今もこの町で暮らしています。それは、まさに奇跡です！ それを住職に伝えたところ、住職は言いました！ “その奇跡こそが五色系の6本目の神秘の力に他ならない”と。」

雪乃は話し終わるとパタンと音をたてファイルを閉じた！

柊園は雪乃の話に何度もうなづきながら「なるほど・・・来栖にはそんな出生の秘密があったのか・・・で、雪乃君はどう考えている

のかね？」とたずねた。

雪乃は 「私はこの話から来栖の二重人格の信憑性が伺えます・・いえ、あえて私の考えを言わせてもらえば、来栖は二重人格を通り超え多重人格なのではと考えています！」

二人の間に沈黙の時間が過ぎていった。

やがて柊園はもみ上げを撫でながら 「雪乃君！君は刑事に向いてるかも知れんな・・・すぐく参考になったよ！」と壁にかけられた時計を見た。

時刻は午後1時を少し回ったところだ。

雪のは普段の明るい女の子に戻っていた 「警部補！今日はデートありがとうございました！警部補に言われたとおり、私は帰っておとなしくレンタルビデオの映画でも見るとします！」と頭を下げると、ファイルを小脇に抱え店を出た。

周りは若者ばかりのファーストフードの店内に一人取り残された柊園は、居心地が悪そうに尻をもぞもぞと動かしながらも食べかけのハンバーガーにかじりついた。

そして、もう一度時計を見上げ、わざとらしく声に出して 「さて、そろそろ滝川医師との約束の時間だ」と立ち上がり店を出たのであった。

(な)

榊原心療病院の五階部長室で二人の男が、向かい合って座っていた。

「どうぞ、私が愛飲している特製の健康茶です。」そう言って滝川は湯呑を柊園の前に差し出した。

柊園は差し出せた湯呑を手で弄びながら、じっと滝川を見ていた。

「魔が差したのです・・・私の中の悪魔が、”やれ”とささやいたのです。」

どこか遠くを見ながら、滝川が言った。

「加島礼子が帰った後、向井刑事が訪ねて来ました。誘導自己暗示で人をあやつれるか？・・・加島礼子はそれが出来るか？と私に聞きました。」そこで滝川は一度言葉を切り。まじまじと柊園を見つめ「私は彼に、出来ます・・・と呟いたのです。」

「それでは・・・魔が指したとは？それから、向井はなぜ高層ビルから飛び降りたのです？」柊園は聞いた。

「ドグマチールを大量に・・・彼は自分から飲んだのです。」

「ドグマチール？」

「はい、心身症などに使う薬の原液を彼は間違って飲み干したのです」

滝川はそう言って自分の健康茶を飲んだ。

柊園も湯呑に口をつけた。 ”意外とうまい” 柊園は一気に、湯

呑を空けた。

「向井君もそうでした。うまいと言って飲み干したのです。」そう言って、滝川はニヤリと笑った。

「まさか・・・?!。」 「そう、いまあなたが飲んだのは、ドグマチールの原液です。」

滝川はまたニヤリと笑うと。

「もう、貴方は自分の意志で身体は動かない状態になっています。」

枅園の上半身が机の上に倒れた。

「今、この部屋には人間の耳には聞こえない音波で、ある音楽が流れています。これから、貴方に催眠をかけその後の行動を操ってみますので、うまく云ったらあの世で向井君と前世の話に花を咲かせて下さい・・・。」

「や・・・やは・・・貴様が、・・・向井を・・・。」

枅園は薄れゆく意識の中で、最後の力を振り絞って言った。

「私はクーエの自己暗示療法で、数多くの患者を救って来た。そして、ドグマチールを投与して”誘導自己暗示”を試すと、その効果は格段の差が出るのが分かった。そんな時、二つの飛び降り自殺が相次いだ。私は、ピンと来て誰かが”誘導自己暗示”を使っていた殺人かもしれないと思っていたところに、貴方の訪問を受けたのです。その頃からでした、私の心の中の悪魔が、囁き続けたのは・・・。」

滝川は柊園を一瞥した。

柊園は辛うじて意識を保っていた。が、声が出ない……。

「さあ、そろそろ治療に取り掛かりますか、向井君の心の病気は、幼い頃の”ウルトラマン”でしたよ……あなたは、何ですかね？、これから私が、誘導催眠で聞き出します。そして、それを利用して”誘導自己暗示をかけて、あるキーワードであなたは高層ビルの屋上から飛び降りるのです。向井君は正義心の塊でした。私でさえ、あんなに上手くいくとは思いませんでしたよ。完全犯罪だと思ったのですけどね……礼子が、あんなにもろいとは……誤算でした。」

滝川は、無抵抗の柊園にヘッドフォンを付けた。

「あなたが上手く飛び降りたら、最後は礼子の、覚悟の飛び降り自殺でこの幕は下ります……ハッハハ……。」

「そこまでだ、滝川！」いき良いよくドアが開いて、柊園の同僚の刑事二人が入って来た。

滝川はすべてを自供した。

動機は自分の（ドグマチール）誘導自己暗示を試してみたかった。と、言うだけのものだった。

柊園にとっては一つの賭けだった。滝川に会う前同僚に携帯から電話をかけて通話状態にしたまま、携帯をポケットに入れといたので

ある。

数日後、滝川は向井事件に関しては不起訴と決まった……。

「向井・奴は不起訴に成った。しかし、やれる事はやった……これから、宇宙の彼方から俺たちを見守っていてくれ！」

枅園は、高層ビルに置かれてある献花台に両手を合わせた……。

立て続けに起こった投身自殺の謎は解けた。

しかし人々の安全を守る警察に休息の時は無い！

解決編・1 来栖の中の女(前書き)

ズラえもん・ながいわれ・ゴジラ 三人の共作です。
() の中は作者の頭文字です。

解決編・1 来栖の中の女

(ズ)

中村課長は喫煙所でタバコをふかす佐古田警部の前に現れると「来栖健二は”心神喪失”と診断された！」と頭を掻いた。

”心神喪失とは、精神の障害により事の是非善悪を弁識する能力（事理弁識能力）又はそれに従って行動する能力（行動制御能力）が失われた状態をいう。

心神喪失状態においては、刑法上その責任を追及することができない！”

中村課長は「とにかく、奴は”ほんとに何も覚えてないのです・・・もう一人の自分が・・・”と繰り返すばかりで、食事さえ口にせんのだから始末が悪い！”と言うわけで、来栖はいったん釈放した・・・ただし泳がすのが目的だ！」

そう言う中村課長はポケットから禁煙用パイプを取り出し口にくわえた。

佐古田警部はその姿を横目で見やると「なんでわざわざここで禁煙パイプなんだ？」とつぶやいた。

(な)

午前十時頃一人の女性が小林刑事を訪ねて捜査本部にやって来た。

小林はその女性を丁寧に迎え、佐古田警部に紹介をした。

「まず、あなたの名前をお願いします。」と佐古田。女性は佐古田警部に向き直って話し始めた。

「私はあの公園の住宅街に住んでいる」玉村紀子　と申します。あの日の午後三時頃、私は二階の窓からぼんやり外を眺めていたんです。」

佐古田と小林は黙って聞いている。

「私・・・なぜ、この家にいるのだろうか？私の生まれてからの三十五年は何だったのだろうか・・・子宝に恵まれず、ぐうたら亭主はいつも午前様・・・！」

二人の刑事は顔を見合わせた。

「あつ、すみません。私が見た女の事でしたね。」そう言って目頭をぬぐってまた話し始めた。

「確か、黒色のコートの襟を立てサングラスをかけてましたわ・・・」玉村紀子は遠くを見る目で、「髪は肩あたりまでのストレート、年の頃は20〜40までは云ってないかも、大柄な女性で大きなボストンバックを持って公園の方に歩いて行きました。」

佐古田は小林に目で合図をした。

「玉村さん、モンタージュを創りたいのですけど！」と小林刑事が言った。

「はい、でも私自信ないです・・・けど。」

「分かる範囲でいいですから・・・。」

小林刑事は玉村紀子を促して部屋の外へ出た。ちょうどその時、警官二人に両腕を掴まれた来栖が連れられて来ていた。

「上からの命令で、こいつ釈放らしいぞ・・・。」

「ほんとか、あれだけの騒ぎを起こして・・・。」

「ああ、難でも被害者の店員の親が被害届を取り下げたそうだ。」

「他にも公務出向妨害・・・。」 「俺にもよく分からないが、こいつ心身症らしい・・・。」

玉村紀子は、来栖が連れて行かれるのをじっと見ていた。

「どうしました？」 小林刑事が聞いた。

玉村紀子は、来栖から目を離さず、「あの時のひと（女）に似てるような気がして」 そう言って、「気のせいですわ。」と続けた。

「さあ、行きましょう。」 小林は玉村紀子を促して、モニタージュ室へと急ぐのであった。

玉村紀子の協力で出来上がった、モニタージュ写真は捜査本部全員に配られた。

しかし、その日の夕方に世間を震撼させる、猟奇殺人が起きようとは、誰一人思いもしなかった。

(ズ)

公園脇の住宅街の一角で、夕飯前の3人の主婦たちが集まり井戸端会議！

エプロン姿の主婦が「さすがにこの時期になると日が短くなって、まだ5時過ぎだというのにもう真っ暗！」と言うと、恰幅のいい主婦が「そうよねえ！このあたりももう少し街頭を増やしてもらいうに町内会で提案してもらわないと・・・子供たちの塾帰りが心配で・・・」とつぶいた。

それを笑いながら見ていた小柄の主婦が、持っていたゴミ袋を見せながら「私明日早出なの・・・ルール違反なのは知ってるけど今出させてくださいね」と収集箱のふたを開けた！

そのとたん、夕闇の住宅街に3人の悲鳴が響き渡った。

住民たちが次々とその声に駆けつけ、通報により佐古田警部と小林刑事もやってきた！

小林刑事が収集箱を覗き込むと、そこには段ボール箱に無造作に放り込まれた男の生首が・・・しかも両目をくりぬかれ、だらりと垂れた舌は右半分が切り取られ、髪の毛をむしりとられた後頭部には、鋭利な刃物で”天罰”と刻まれていた！

胴体部分は収集箱の裏の50センチほどの隙間にうつぶせに横たわっているのを制服警官が発見した。

警察の調べで身元は 山岸元雄 43 住所不定と判明した。

喫煙室で佐古田警部は、小林刑事の報告にタバコの煙を吐き出しながら「山岸元雄」・この男は、公園の浮浪者暴行事件の被害者の一人だ・たしか、マッサンが会いに行っただと言っていた。」と短くなったタバコをもみ消したのであった！

(ズ)

翌朝 その日は早朝から、住宅街殺人事件の捜査会議が開かれていた。

会議室には佐古田警部をはじめ、小林刑事ほか数名がテーブルを囲んでいた。

そこに、ドグマチールを飲まされた柘園警部補が検査のため少し遅れて入って来た。

いつもと変わらず苦虫を噛み潰したような顔でドアを開けた柘園に、佐古田警部は「おう・！まっさん！検査のほう、どうだった？」と心配げにたずねた。

柘園は席につきながら「ご心配おかけしました。吐き気が多少残ってますが、検査では問題ないとの事でした！」と軽く頭を下げた。

会議は再開され、佐古田は「事件当日、来栖が釈放されている・・しかし、司法解剖の結果、殺害されたのは前日の深夜！つまり来栖はまだ署内に拘留されていた。したがって犯人は来栖ではない・・

・現在来栖には、見張り役を自ら志願してきた青木婦警が今朝から張り付いている。そうだね小林君。」

小林は立ち上がり「はい！青木君には来栖の行動を遠巻きに見張るだけで、接触するなど言っておりませんし、ここにいらっしゃる皆さんより婦警のほうが怪しまれ無いただろうという私の判断で許可しました！」

佐古田は小林の言葉にうなづきながら「今回の事件と前回の公園首切り事件の類似点は、首を切断していることと、天罰の文字が書かれていた事！しかし！首の切断面が全く違う・・・公園の方は鋭利な刃物が使われていたが、今回の方は刃物ではない何か別の物で・・・切断というより、引きちぎられた！と表現したほうが良からうかと思う。しかも殺害場所は発見された場所ではなく、殺害後あそこに運ばれたと思われるが、まだ殺害場所は不明だ！」

佐古田の説明は続く

柊園は佐古田警部の説明を聞きながら、メモを取り、自身の行動と照らし合わせていた。

★公園首切り事件！

被害者は岸田杜雄（48）・致命傷は後ろからの刺し傷。

死亡推定時刻は、死体が発見された日の午前五時から九時。
死体が公園に遺棄されたのは午後二時から四時の間。

同時刻に主婦が不信な女を目撃・午後5時半ごろ遺体発見。その後モニタージュ作成、配布済み。

同日午後7時ごろ、メゾンで柊園は加島・滝川と会う。 ほぼ同時刻、来栖拘束！

その日深夜、午前1時から3時、第二の殺人事件（この時点では未発見！）

翌日、柊園・青木休暇 午後1時、来栖釈放。同日午後2時、滝川と会う。

同日夕方、第二の首切り発見！

被害者は山岸元雄（43）・遺体は目をくりぬかれ、舌を半分切られ、体に多数の擦り傷・致命傷は頸椎骨折。

どちらの遺体にも“天罰”の文字★

柊園はペンを置き、もみあげをつまんだ！

都心から2時間ほど車を走らせると、オートキャンプ場“樹の海”の看板が見えて来る！

海岸に面して雑木林が連なるその一角に、数台の車が止められるスペースがあり、その脇にテントが張れるようになっている。

木立の間にコンクリート製の炊事場とトイレが常設されている家族向けのオートキャンプ場である。

管理人の古淵は、その日も朝早くから見回りにきていた。今はシーズンオフで利用客はいない！しかし、ほっておくと、不心得者の手により不法投棄の山となる。

古淵は林の中に足を踏み入れた！そこにはナンバープレートを取り外された一台の車が止められている！

“クソー！放置車両か”車は天井部分が幌で出来た、ジープと呼ばれるオフロードタイプの車だった。“チッ！”と舌打ちをしながら車に近づいた古淵は、思わず息を飲んだ！

車の荷台部分は血だまりになっており、中央にはたっぷりと血を含んだ寝袋が捨てられていた。

住宅街のゴミ箱から首切り遺体が発見される8時間ほど前の出来事である！

(ズ)

捜査会議を終えたところ、柵園他数名の捜査班のもとに、隣町から“怪しい車を発見した、首切り事件に関わりがありそうだ。”との連絡が入った！

佐古田警部と小林刑事がパトカーで駆け付けた時にはすでに正午を少し回っており、現場にはロープが張られ現場検証も始まっていた！

制服警官が佐古田に駆け寄り「ご苦労様です！」と敬礼し「車に残された大量の血液と微量の肉片は、住宅街で発見された“山岸元雄”のそれと一致しました。あと、ナンバープレートは取り外されており、車体ナンバーから所有者の割り出しと、車の至るところに残された犯人の物と思われる指紋を現在照会中です！」

佐古田は、制服警官の言葉にうなづきながら「うん！なるほど・・・今君は微量の肉片と言ったが、それは車のどこにあったのかね？」

とたずねた。

制服警官は車の前方に回り 「ここに絡まるように付着しております」 と指差した！

そこには直径4ミリほどのワイヤーロープが巻かれた電動ウインチが取り付けてあり、巻き取られたワイヤーロープに血液らしきものがこびり付いていた！

血の付いたワイヤーロープを覗き込むようにながめていた佐古田警部はやがて顔を上げると 「小林君！ “山岸元雄”の首を切断した凶器がわかったぞ！」 と振り返った。

小林は 「警部！ 確か・・・被害者の首は刃物でなく、引きちぎられたようになっていたと・・・！」

佐古田は頷きながら 「うん！ おそらく凶器はこのウインチだ！ 犯人はウインチからワイヤーを伸ばし、先端のフックをどこかに・・・たとえば電柱のようなものに固定し、たるませたワイヤーに輪を作り被害者の首に巻きつけた！ そしてウインチのスイッチを入れる・・・首に巻かれたワイヤーは次第に首に食い込み、やがて骨を砕く！」

小林はメモを開きながら 「なるほど・・・しかし、被害者の死因は窒息でなく頸椎骨折となっていますが」

佐古田はやや声を荒げ 「4ミリほどのワイヤーだ！ 窒息する前に骨まで達する！ そして、体にできた無数の傷はワイヤーが巻かれるときに体に擦れて出来た傷だろう！」 と、車の後ろに回り、荷台部分を覗き込んだ。

佐古田は血だまりに沈んだ寝袋を指差し「犯人は遺体をこの寝袋に押し込み、この車で発見現場まで運び遺棄した。その後この場所に車を放置・・・そう考えてほぼ間違いないだろう！」

小林は持っていたボールペンで開かれたメモ帳を叩きながら「1トン以上の車を引っ張る電動ウインチ・・・その力でワイヤーを巻き上げたら骨まで到達するのに数秒・・・窒息死する前に骨は碎かれる！言われてみれば確かにそのとおりです。」

佐古田は感心する小林の顔を見つめながら「だが、犯人はなぜ目玉をくりぬき、舌を切断したのか・・・」とつぶやき、もじやもじやの髪の毛を掻きむしった。

無線連絡のため、道路わきに止めてあったパトロールカーに戻っていた先ほどの制服警官が、腕を組み考え込む佐古田と小林のもとに、再び駆け寄って来た！

「警部！ たった今無線連絡があり、車の所有者がわかりました。所有者はここから五キロほど先にある“ミドリ製紙”の独身寮に住む“勝山誠二”（かつやませいじ）23歳・・・車に残されていた指紋を照会したところ、前歴もあるようです。」

佐古田警部は「前歴!？」と眉間にしわを寄せた。

制服警官は続けた。「はい！勝山は17の時に両親が離婚・・・母親は実家のある島根県に帰り、誠二はそれをきっかけに母方の勝山姓を名乗り一人暮らしを始め就職する。ですが・・・気性の荒さから長続きせず、職場を転々としていたようです！前歴というのは、勝山がミドリ製紙に入社して間もないころ、盛りの付いた猫

がうるさいといって登山ナイフで舌を切ったり、目を潰したり・・・
なかには前足を切り取られた野良犬もいたようです！　しかし、犬
猫がうるさいというのはその場の言い訳で、実際には傷つけられた
動物たちの苦しむ姿を見て喜んでいたという話です！　2年ほど前
のことですが、動物愛護団体から動物虐待で訴えられ始末書を書か
されています！　ほかにも路上で喧嘩騒ぎをおこしたこともあり、
そのときの調書に驚きの事実が記載されてたそうです・・・！」

制服警官の言葉に、佐古田と小林は互いの顔を見合わせるのであつた。

(な)

東関大学心理学の講師である白羽^{しろはね}三郎は、今世間を騒がしている連続(猟奇)殺人に興味を持っていた。

そんな折のある昼下がり、一人の男が自分が経営している探偵事務所
のドアを叩いた。

男は来栖健二と名乗り、自分は二重人格みただからそれを監視して
ほしいという。

白羽は指を鳴らした、興味を持った時の彼の癖である。

来栖は今までの事を出来るだけ詳しく白羽に話した。

「分かりました。出来る範囲でやってみましょう。」白羽はニコニコしながら答えた。

「それと、報酬の方が・・・」と来栖は情けない顔をした。

「大丈夫です、一応大学の講師の合間になりますが、それでよろしかったら小遣い銭で結構ですよ。」

来栖は礼を言うと、手付金ですと言って一万円を置いて行った。

白羽三郎、三十歳独身・・・人は彼を稀有の天才と噂する！

青木婦警は優越感にしていた。

夢に見ていた私服で、重要参考人(?)を尾行している。

青木婦警は一人悦に入っていた。

尾行して数日経った頃、来栖はあるビルに入って行った。

「しらはね・・・探偵事務所・・・?。」 青木婦警は首をひねった。

”何をしに・・・?”しばらく青木婦警は隠れて待つことにした。

釈放された後、来栖は仕事もせずにブラブラしていた。昼前まで、臨港苑で寝ていて、夜は屋台で”一杯”の繰り返しだった。

”この男、何かおかしい・・・。” 尾行している、青木婦警の第六感が訴えていた。

”もしかして、来栖が連続首切り殺人の犯人では・・・?!”

もし私が捕まえたら、刑事課への転身も夢ではない。

青木婦警はニヤリと笑い 「女刑事 雪乃 参上!!」

思わず大声を出し、慌ててあたりを見回す青木婦警であった。

来栖は探偵事務所を出ると臨港苑に戻った。

青木婦警は着かず離れず来栖を尾行していた。 ♪♪

青木婦警の携帯が鳴った。電話は小林刑事からだった。

青木婦警は今までの状況と、来栖が猟奇殺人犯だと思う。と、自分の考えを小林に伝えた。

「・・・何か証拠でも見つけたのか？」と小林刑事。

「証拠は・・・まだ・・・」

「残念だが、公園の首切り事件の犯人は女だ。君にモンタージュ写真は渡してなかったかな？」

「いえ・・・まだ・・・です。」と、青木婦警は答えた。

”おんな・・・?!” 青木婦警のなかで、今までの自信が音をたてて崩れていた。

小林はなおも続けた。

「ごみ箱の首切り事件の方は、来栖は死亡推定時刻には身柄を束縛されていた。それに、容疑者が浮かんだ。多分真犯人に間違いはないと思う。」

「・・・・・・・・・・。」

「もう今日で、尾行は中止だ。明日からは君は本来の仕事に戻ってくれ。」

そういつて、携帯は切れた。

”フゝツ”と青木婦警はため息をついた。

”しかし、来栖の生い立ちは異常なものだった。（来栖の）頭の中には生まれて来るはずだった女の脳がはいっている。”

「まさか、女の人格が・・・！？」　そう言つて青木婦警は臨港苑を見つめた。

臨港苑の古びた窓から、来須は口元に獰猛な笑みを浮かべ、青木婦警をなめるように観察していた・・・・・・・・。

解決編・2 白羽の推理(前書き)

ズラえもん・ながいわれ・ゴジラ 三人の共作です。
() の中は作者の頭文字です。

解決編・2 白羽の推理

(ず)

佐古田警部たちが隣町のキャンプ場に向かっていたところ、柊園警部補は激しい吐き気のため一人仮眠室で横になっていた。

簡易ベッドに身を投げ出したまま、会議中にまとめたメモを開き考え込む柊園警部補！

“山岸が殺害されたのは退院2日目……しかも暴行を受けた傷は完治しておらず、松葉杖をついての退院であり、本人自らの希望により病院側の反対を押しきってのものだ！その前の公園での被害者は岸田杜雄……同一犯か……？……いや岸田と山岸との接点はない……山岸は四畳半のアパートを四人の仲間たちと協同で借りている。だが実際にはホームレス同然の生活を送っている……寝ていて3食たべられる病院のほうが居心地はいいはず……！山岸の入院中に誰かが尋ねてきた……？その誰かに会うために退院を急いだのではないか……？そして山岸はその誰かに……”

すっきりしない頭をもたげ、壁の時計に目をやると針は正午を指している。柊園は“もうこんな時間か”とベッドから立ち上がった！

柊園は表に出ると“山岸元雄”が入院していた国立病院へと向かった。

(ゴ)

来栖は、かすみ飛び降り自殺した現場へと向かい花を手向けて手を合わせていた。

その来栖の姿に気付かれないようにそっと後ろから忍び寄る女が居た。

来栖がひとしきり手を合わせて俯いた後顔を上げて「ふー！」とため息をついていると

黄色のワンピースに身を纏った女が後ろから声を掛けた！

「まだあんな女の事が忘れられないの？・・」

来栖がしゃがんだまま振り返るとそこに立ってた女はあのカラオケボックスの舞子だった！！

「なんだ君だったのか・・あの時はごめんな！・・」

舞子は、左右に首を降りながら「もう終わった事だからいいよ！」

来栖が舞子のほうへ近づこうと、一歩足を踏み出したとき舞子は”フツ”と、音も無く姿を消したのである！

この来栖の様子を少し離れた位置から見ている女が居た！
電車の中から尾行していた青木婦警だったのである。

(ズ)

柊園警部補は国立病院の婦長と話していた。

婦長はデスクに置かれたカルテを開き 「山岸さんに来客?・・・
いいえ、お見舞いには誰もこられてません!」

柁園はもみあげをつまみ 「では・・・同じ病室で親しくしていた人は
?」

婦長は左右に首をふり 「山岸さんと一緒に入院されたお友達が、
思ったより重症で観察室に移ったため、山岸さんは退院する2日前
まで4人部屋に1人でいたんです。」

柁園はうなづき 「2日前・・・その2日間はだれかと同室だったわ
けですね!その2日間一緒にいた人というのは?」

婦長は別のカルテを開き 「バイク事故で入院されてた23歳の男
性です・・・もともと山岸さんとは離れた病室だったんですが、す
ごく苦情の多い人で、同室の人のイビキがうるさいとか、他の方の
見舞いに来る子供が騒がしいとか・・・とにかく文句ばかりで・・・
それで退院まで2日ほどだったんですが、見舞い客のない山岸さん
と同室にしたんです! 仲良くしてたかどうかはわかりません。」

柁園は手帳を取りだし、同室だった人物の名前を控えると病院を
後にした!

(ズ)

制服警官は二人の顔を交互に見やり 「そのときの調書に驚きの事
実が記載されてたそうです・・・! “勝山誠二” は両親の離
婚前は父方の苗字を名乗っていました。」

佐古田警部は 「ん! 父方?・・・そのことが何で驚きなん

だ？」と、制服警官の顔をにらむように見つめた。

制服警官は”ゴクリ”と喉を鳴らし「誠二の父方の姓は……
“山岸”……誠二の父親は殺された“山岸元雄”です！」

佐古田警部はもじやもじやの髪の毛がちぎれるほどに掻き回していた！

杣園警部補は、病院を出ると携帯を取りだし、佐古田警部に連絡を入れ互いに得た情報を交換した。

佐古田は「現在勝山誠二の行方は地元警察がさがしている！ ああ！！それと、まっさん！ 来栖の様子だが、小林君が青木君に確認したところ、別段変わった動きは無いようだ……青木君には有力な容疑者が浮かんだので尾行を中止するよう伝えた、我々もあと一時間程で署に戻る。」と告げると電話切った！

(な)

「青木さんが帰って来ないのですけど。」

刑事課のドアが開いて春日主任婦警が入って来た。

午後8時を三十分過ぎている。

「小林君、どうなってるの？」 春日婦警が小林刑事を睨んだ。

小林は首をひねりながら、「まだ、尾行してるのかな……?!。」

そう呟いて、小林は携帯を耳にあてた。

” オカケニナツタデンワバンゴウハ・・・”

「可笑いなあ・・・つながらないぞ!？」

「家にかけても、まだ帰ってないそうよ。」

春日の顔は、” 青木婦警に何かあったらあなたのせいよ!! ” と言っている。

小林は中村課長の方を向いて、困った顔をした。

「勝山の方は気にしないで、臨港苑まで行って見てくれ、来栖に見つかったのかもしれん。」

中村はそう言って「駅にまっさんがいるから、警邏113（パト）で拾って一緒に行ってくれ・・・。」と続けた。

「了解!」

小林は刑事課を飛び出して行った。

「春日君も、あとは任して帰りなさい。」

中村は心配顔で立っている春日婦警に声をかけた。

春日は「よろしくお願いします。」と言って部屋を出て行った。

「よし、では本題に入るぞ勝山誠二についてだが!」

機械的な新藤本部長の声が、刑事課の捜査本部に響き渡った。

(ゴ)

小林は駅で柊園警部補を乗せると、間もなくあの13階だてのビルに到着した。

パトカーから降りた2人は付近を搜索しているうちに街路樹の根っこの落ち葉に半分隠れた携帯電話を小林刑事が発見！

小林は「警部補！青木婦警の携帯みたいですよ！！」

柊園は「間違い無いかね??」と、もみ上げをつまみ上げた。

(ズ)

青木雪乃婦警が目を覚ましたのは、薄暗い部屋の片隅だった！

意識が朦朧としている！

”ここはいつたい……そうか！あるとき来栖に見つかったんだ。……来栖は私の顔を知らないし、私が尾行していることも知らないと思ってた……いつ何処で気づかれたのか……線路脇で来栖が迫ってきた！私はとっさに携帯を取り出して友達と話してるフリをした……来栖が私の横を通り過ぎた！もういいだろう、私が振り向いたときそこには見知らぬ女が立っていた……一瞬の出来事だった、私の手から携帯が地面に落ちてバッテリーが飛び出す様子が見えた……あの女はもしか……”

青木婦警は自分の体が動かないことに気づいた、仰向けのまま手足

は何かで縛られているようだ。

意識は戻るどころかどんどん薄れていく・・・

ドン・・・バタン・・・ギシッギシ・・・ギシどこからか物音が聞こえる。

”おい！地下室があるぞ”

雪乃は薄れ行く意識の中、枳園警部補の声を聞いた気がした・・・

翌日、佐古田警部は隣町の警察から”勝山誠二”の身柄確保の連絡を受け駆けつけていた。

勝山は深夜コソコソとミドリ製紙の寮に戻ったところを、張り込んでいた二人の刑事が取り押さえたということであった。

佐古田警部が立ち会う中、勝山は、特に抵抗もせず取調べは順調に進んだ。

供述によると、殺害方法は佐古田の推理通りウインチを使ったものであり、現場は死体遺棄現場から5キロほど先にある鮮魚市場の跡地と判明した！

流れ出た血液は鮮魚市場跡地にあった工業用水を使い海に流し、くりぬいた眼球および舌の一部は海に捨てた。

山岸がついていた松葉杖を蹴り飛ばし、倒れたところに馬乗りになり眼球をくりぬいた・・・凶器は勝山の車に積んであった登山ナイフ

であった。

痛みに転げまわる山岸を押さえつけ、舌をつまみ出し切断しようとしたが、舌を引っ込める力に手がすべり、右半分だけを切断……。その後、車に搭載されていたウインチのワイヤーロープを首に巻きスウィッチを入れたのである。

殺害理由は、過去に山岸から虐待を受けており、そのときの山岸の目が恐ろしかった……。それ以来犬でも猫でも目が怖かった、じっと見つめられると背筋が凍るほどの恐怖に駆られ我を失うとの事であった。

佐古田が、後頭部に刻んだ”天罰”の文字についてたずねたが、自分が山岸殺害前に起こった公園での首切り事件をニュースで知り、警察を錯乱させるために真似ただけであり意味は無い、と答えた。

公園で発見された岸田杜雄の死亡推定時刻は午前五時から九時……。その間の勝山のアリバイは、ミドリ製紙の社長の証言で成立している。

(な)

勝山が佐古田警部に取り調べを受けている頃、白羽探偵事務所を来栖が訪ねていた。

「白羽先生はいらっしゃいますか？」

「先生はまだ大学から帰ってないのですが……。！」
事務所にはいた男はすまなさそうに言った。

「あなたは？」と、来栖は聞いた。

「私はこの事務所で雑用係をしている、大場と申します。」

大場は名刺を来栖に差し出した。来栖は名刺をうけとって、「実は、この間頼んだ事は私の気のせいでしたので、もういいですと先生にお伝えください。」

それだけ言うと来栖は、帰って行った。

それから、暫くして帰って来た白羽は、大場からその話を聞くと「面白い」と言っけしきりに指を鳴らすのであった。

(ズ)

「と、言うわけで・・勝山は岸田杜雄殺害には関与しておりません！」

佐古田警部の報告に中村課長は啞えた禁煙パイプを上下にゆすりながら

「なるほど・・しかし、山岸って男もかわいそうな男だな・・・経営してた自動車工場は騙し取られ、女房にゃ逃げられる！ホームレスにまで落ちぶれて、拳句の果てに実の息子にころされる・・・か！！」

佐古田は「山岸は息子の誠二が、かわいくてしょうがなかったらしいです・・・だから余計に厳しく接してしまっただけでしょうな・・・」

中村課長は 「うん！・・・しかし・・・模倣犯とはな・・・！ 同一犯で一氣に解決と行きたかったな！」

佐古田はもじゃもじゃ頭を掻きながら 「その、岸田事件なんです
が、まっさんは来栖を疑ってるようです。」

中村課長はポケットからタバコを取り出し、啜っていた禁煙パイプ
をゴミ箱に放り込みながら 「禁煙はやめだ・・・イライラしてい
かん！ で・・・まっさんは何で来栖を？ あのモニタージュはど
う見ても女だぞ！」

佐古田は首をひねりながら 「まっさん、まだドグマチールが抜け
てないのかな・・・とにかく私もまっさん達に合流します！」と部
屋を後にした。

(な)

青木雪乃は意識を取り戻した。目をあけるときつと病院のベッドで、
やさしい家族に見守られているに違いない。

雪乃はゆっくり目をあけた。

闇が雪乃の瞳を支配していた。身体を動かそうにも、両手両足を大
の字の形で縛られているのか動かない・・・。

雪乃は何とも言えない恐怖を感じた。

” 柊園さんの声を聞いたように思えたのは、気のせいだったのかし
ら？！ ”

雪乃の目が、徐々に闇に慣れてきて頭が動く範囲であたりの様子が見えて来た。どうやら地下室みたいところで、ベットに荒縄で両手両足を縛られている。

寒さを感じているのは、衣服ははぎ取られ裸同然の姿でベット上で縛られているためだ。

”まだ、結婚前なのに・・・” 雪乃は場違いな事を呟き、思わず笑みをこぼした。

しかし、その笑いは恐怖のひきつりへと変わって云った。

天井から、ボーガン(?)が雪乃を狙っている。その横には60..00 59;59 59..58と何やらデジタル数字が数を刻んでいる。雪乃がその意味を悟るのに数分とはかからなかった。

”あの減っている数が00..00に成った時、ボーガンは放たれるのだ・・・”

「キヤーア！誰かたすけてえ・・・」

雪乃は絶叫した・・・。

57..58・・・57..56・・・57..55・・・。

(ズ)

「キヤーア！誰かたすけてえ・・・」

雪乃が絶叫し、力の限りもがいてみたがどうにもならない！

”とにかく、落ち着いて” 雪乃は自分自身に言い聞かせた。

”でも、さっき聞こえた柊園さんの声幻聴だったのかしら……ん……幻聴って……？　　そういえば線路脇の献花台に花を供えた来栖は、ぶつぶつと独り言を言ってた！　　たしか……あの時はごめん……とかなんとか……！　　あの時来栖のそばには誰もいなかった……　　来栖の耳には誰かの声が聞こえてたのか……。　　あれは、かすみさんに語りかけてたのか……？　　ちがう！……来栖の口からは間違いなく別人の声が出ていた……女の声だ！”

雪乃は自分のおかれた状況を忘れ、目を閉じた。

”あれはきっと来栖の中の女が幻覚を見せてるんだ……来栖の女の人格が本来の来栖が知ってる女として頭の中に姿を現した……そして少しずつ来栖の頭の中で実体化して、やがて本来の来栖と入れ替わり表舞台に立とうとしてるんだわ！　　その後私の横を通り過ぎた来栖は女の人格と入れ替わってたんだ……私が振り返ったときそこにいた女は……来栖の……”

雪乃は　「そうよ！きつとそうよ！」と声に出して言い、思わずガツポーズをとろうとして縛られている状況を思い出した！

デジタルの数字に目をやると　51…37

「誰かたすけてえ……！！！」

雪乃は力の限り叫んだ！

来栖が白羽探偵事務所に向かうため臨港苑から出で行くのを確認した白羽は、柊園の前に立ち「ここです!」と、臨港苑の厨房跡の奥にあるドアを指差した!

柊園はドアを開け中を覗く「おい!地下室があるぞ!」と、振り返りもみあげを触った!

小林刑事が転がっていた椅子を振り上げ、南京錠のかけられた木製のドアに投げつけた・・・2度・・・3度・・・4度目にドアが壊れ、中から雪乃の叫び声が聞こえてきた!

「誰かたすけてえ・・・!!」

柊園は小林を押しつけ「雪乃君!何処だ?」と、階段を駆け下りた・・・そこには、ボーガンに狙われた半裸の雪乃が大の字に縛られていた!

階段を下りながら「警部補!青木君無事ですか?」と、駆け寄ろうとした小林に、柊園は「小林君!ちょっと待て・・・」と制すと、上着を脱ぎ半裸の雪乃にかけたのであった!

雪乃は顔を赤らめ「警部補・・・!」と小さくつぶやいた。

そのとき、デジタルの数字は 29..01 と表示されていた!

翌日、柊園と青木は署内で白羽と話していた。

青木が二人に来栖の線路際での行動（来栖の中に別の女の人格が現れ独り言を言っていたことや、結合双生児として生まれたこと）

と自分の考えを伝た。

白羽は「私も来栖自身から、自分に二重人格の疑いがあるため行動を監視してほしいと依頼され、あの時来栖についていました・・・確かにあの時来栖のそばには誰もいませんでした・・・残念ながらあなたと来栖がすれ違った直後、先回りしようとした私は、あなたを襲った人物を見ていないのです・・・青木さん！　あなたを襲ったのは見たことの無い女だったんですね！」

雪乃は大きな目をクリクリと動かしながら　「はい！」　とうなずいた。

柊園がファイルから一枚のモニタージュ写真を取り出し　「君が見た女というのはこの女ではないのかね？」　ともみ上げをつまむ。

雪乃が手に取り　”　ハッ！”　と息を呑む！

（な）

「先生、来栖はいったい何者なんです？」

大場はソファで一服している白羽に向かって聞いた。

雪乃が臨港苑の地下室から助けられた次の日の午後の事であった。

白羽はニッコリ笑い、二、三回指を鳴らすとゆっくりと話し始めた。

「来栖は多重人格者なんだよ、私が調べた限りここに依頼に来た来栖と富士見会と繋がりがある来須、そして来栖の人格を乗っ取るうとしている女性の人格が居る。」

そこで一度言葉を切り、大場を見てまた指を鳴らした。

「あの公園の猟奇殺人の犯人は来栖の女の人格だよ・・・。」

そう言って白羽はまたニツコリ笑った。

「ほんとですか？」大場は思わず聞き返した。

「ああ、まず間違いはない。柝園とか言う刑事も、薄々感づいてたよ。」

「先生は、もう全部分かっているのですか?!」

「分かっているつもりだよ、でも、この事件は遅かれ早かれ警察によって解決されるだろう。」そう言って、白羽はソファから立ち上がり窓から外を眺めた。

「この前、私の大学の教え子二人が九州で行方不明になった。私には今そちらの方が心配だ。」

そう言って白羽は苦い顔をして大場を睨んだ。

(ズ)

来栖健二は白羽探偵事務所を出ると、金物屋に立ち寄り、肉切包丁を買い、行き付けの屋台で酒を飲んだ。

臨港苑に戻ったところには深夜となっていた！

万年床にゴロリと身体を投げ出し目を閉じると、かすみの笑顔が脳裏によみがえる！ “かすみ・俺もお前の所に行くよ・俺は・いや、俺の中の別の俺がお前を死に追いやった・公園で死んだ男も・・・！”

来栖は買ってきた肉切り包丁を両手で握り、自らの喉元に押し当てた！

“かすみ・・・天国で、二人一緒に幸せになろうな！”

来栖の両手が動こうとしたその時、激しい吐き気と頭痛に襲われた！

“うっ！” 包丁を持っていた手が感覚を失い、包丁は耳をかすめ布団の上に転がった。

頭を押さえ転がり回る来栖の頭に、聞き覚えのある女の声が響いた。

“お前の身体は私の物だ！ 死なせはしない ほほほっ！”

来栖は頭の痛みをこらえながら 「その声は・・・ま・舞子？ どうして俺の中に・・・」

“ほほほっ！ 私は一枝^{かすえ}お前の姉として産まれるはずだった・・・”

不気味な笑い声とともに、来栖の目の前にぼんやりとした黒い影が現れたのであった。

(な)

来栖の人格は女に変わっていた、本来双子の姉として生まれるはずだった一枝に。「うえっ・酒だ、この男また酒を飲んでいる。」
一枝は吐いた。

「そうだわ、地下室で婦警が串刺しに成っている頃だわ。」

一枝は、まだふらふらしながら女の服装に着替えて地下室に降りて行った。

”なぜ、私は岸田を殺したのだろうか?!、首を切断し危険をおかして公園のすべり台に放置した。そして、今度は婦警を惨い方法で殺した・・・なぜ?”

「あっ!」地下室のドアの前で一枝は立ち止った。

地下室のドアが壊されている。恐る恐る一枝は地下室に入って行った。

ボーガンはベットに刺さっていた、しかし、ベットの上には血まみれの婦警では無く、初老の男がもみ上げを触りながら座っていた。

「来栖健二・・・!! 岸田杜雄 殺人、死体損壊、死体遺棄。青木婦警殺人未遂容疑で逮捕する。」

そう言って柵園はベットから立ち上がり逮捕令状を見せた。

地下室の暗闇から小林刑事たち数人が飛び出し一枝を確保した。

「何をするの、私は来栖健二ではないわ・・・!!」

一枝は抵抗した。

柊園は困った顔を一枝に向け独り言のように呟いた……
……「貴方は病氣なんです。」

……来栖一枝(?)は、その場に崩れ落ちた……。

(ズ)

「貴方は病氣なんです。」

柊園の言葉に、一枝と名乗る女はその場に崩れ落ちた……「うつ・
・うつ……！」と吐瀉物を吐き出した。「“チクシヨウ”
この男が酒さえ飲んでなければ、お前らなんか……うつ・
！」ハアハアと肩を上下させながら柊園を見上げる来栖の目に穏
やかさが戻った！

来栖は「刑事さん！　・俺を・俺を・死刑にしてください
！」と両手を差し出した。

翌日、柊園と佐古田は会議室でテーブルを挟み、向かい会って座っ
ていた。

佐古田は「来栖の様子はどうか？」とポケットから煙草を取り
出した！ 柊園は「昨夜からずっと監視をつけて見張らせてます
が、非常に穏やかで今のところ、例の女の人格は現れていません！」

佐古田は「そうか・・・」と、うなずき、2枚の紙と一冊の本をテーブルに置いた。

2枚の紙を柊園の前に差し出し「まっさん！これは、来栖の生まれた時の病院のカルテだ・・・そしてこっちは分離手術を行ったときのものだ・・・どちらも担当医はすでに他界してるため、現在の院長に訳を話しファックスで送ってもらった・・・それを見る限り、本当に来栖が岸田杜雄事件に関与してるとすれば、女の人格を持つという君らの考えも否定は出来そうにないな！」

柊園は、佐古田の持ってきた書類に目を通すと、テーブルに置かれた本を手にとった！

表紙には秋田の”なまはげ”のようなイラストが描かれ、見出しに小さな文字で”日本の伝説・おらが村の言い伝え”と書かれあり、その中央には大きな文字で”むかしむかしのことじやった”とタイトルが書かれていた！

*** むかしむかしのことじやった

むかしむかし、とある山村で次々と結核患者が現れた！

村人たちは病がうつるのを恐れ、結核患者たちを山中の山小屋に隔離した。当時は医療技術はおろか、薬さえもない。患者たちはただひたすら神に祈り死をまつた。

こうして村人たちは病から逃れ、村には平和が訪れたかのようにおもわれた・・・しかしその時を境に、山村では作物は不作となり、家畜は次々と死んでしまう！村人たちは明日の食料にも事欠くようになったのである。

その時、村人たちの前に一人の僧侶が現れた！

「この村には魑魅魍魎が漂っておる。」僧侶は山を指差し

「元凶はあの山にある！ただちに山小屋を取り壊し、そこに寺を建てるのじゃ。」

村人たちは寺を建て、結核に苦しみ死んでいった者たちを吊った！

僧侶の読経とともに死者たちの塔婆からいくつもの白い煙が立ち上ぼり、互いに絡み合う・・・やがて一本の煙柱となり、しだいに龍へと姿を変えたのである！

龍へと姿を変えた死人の御霊は村人たちを見据え、大きく口を開き黄金の玉を吐き出した。

村人たちから驚きの声がかかる中、龍は再び煙柱となり天高く舞い上がり消えていったのである！

僧侶が玉を手に取り村人たちに掲げて見せた。

それは幾千もの糸が絡み合い玉のように見えた物・・・僧侶は絡み合う糸を丁寧にはぐし、木箱に入れた。

「村人たちよ！ 邪悪なるものたちは立ち去り此処に五色の糸が生まれた・・・これより自身の手で5本の糸を取り護符に収めるのじゃ！ さすれば村人たちに平穏な日々が訪れる。だが！ けして”たがう”べからず！ 糸が5本より多かれど少なかれど災い来たる！！」

僧侶の読経の中、村人たちは順番に5本の糸を取り護符に収めていった。

村人たちがすべて取り終えたとき、僧侶も読経を終え 「これより先、新しい命の宿るとき、妊婦は生まれ来る子のために、此処に來たりて五色の糸を護符に収めよ！」

村人たちは手を合わせ、祈り続けた。

その後僧侶は寺に住み、その生涯は200年を超えたと言われている……！

むかし　むかしの事じゃった！　***

佐古田は 「まっさん！　来栖の様子を見に行こうか」 と立ち上がった。

柘園は、開いていた本をパタンと閉じた。　そこへ、小林刑事が白衣を着た一人の男を連れてやってきた 「失礼します！　こちらが榊原心療病院の榊原博之院長です」 と、小林が紹介すると 院長は 「榊原です！」 と頭を下げると柘園のほうに向き直り 「柘園警部補！その節はうちの滝川が……」

院長の言葉を途中で制し、柘園が言った 「いやいや！ その件はもう……それより、来栖のMR検査の結果はどうでしたか？」

4人はそれぞれに席に着いた。

院長は 「結論から話します！ 来栖の頭の中には皆さんがおっしゃるとおり二つの脳が存在します！ しかも、片側は少しずつ大きくなり、それにつれて本来のものは徐々に活動の停止が見られます・・・・おそらく一枝と名乗る女の脳が来栖本来の脳を支配するまでに時間はかからないものと思われます」

柊園はもみあげを触りながら 「しかし・・・・来栖にはもう一つ男の人格が存在するはずなんですが・・・・？」と、院長を見た。

院長は左右に首をふりながら 「いいえ！ 来栖は解離性同一性障害・・・・俗に言う二重人格ではありません！ もし来栖に男の人格が現れたのだとすれば、それは来栖中の一枝の脳が、存在そのものを否定され虐げられ続ける心的外傷から逃れようとした結果、解離により個人の同一性が損なわれ、解離性同一性障害にかかって・・・・」と、そこで言葉を切り、首をひねる刑事たちの顔を交互に見やると 「わかりやすく言えば、ここに来栖と一枝という二人の人間が存在するとして、私が言いたいのは来栖でなく一枝が二重人格だということです！」

3人の刑事は、互いに顔を見合わせたのであった。

佐古田警部は頭をかき回しながら 「一枝が・・・・？ だとすれば秋葉と浮浪者6人はなぜ殺されなかったのでしょうか？」

院長はコクリとうなづき 「ですから、現れた男は来栖でも一枝でもないからです！ 皆さんは、ビリーミリガンと言う男をご存知でしょうか？ 彼も多重人格でした・・・・しかも驚いたことに、なんと彼は24人もの人格を持ってました。その24人の人格は性格だけでなく、1人1人性別も年齢も言語までもが異なり、1人1人

名前を持っていました。そのうちの1人”フィリップ”が性犯罪をおこし逮捕されたのです・・・警察当局はビリーの多重人格を芝居ではないかと疑い、徹底した検査が行われましたが、真似できないようなイギリス訛りや、煙草を吸う人格などそれぞれの人格に入れ替わり、でまかせとは思えないものだったため検事間や弁護士、精神医学者には演技ではないと信じられた。そして、結果は24人は全て別人であるとの見解が出されました・・・すなわち、一枝に現れた男の人格も一枝とは全く違う性格を持っているのです！」

院長がそこまで話したとき、会議室のドアがノックされ、制服警官がドアを開けた。　「来栖に変化が現れました！」

(な)

「・・・この異様な不連続猟奇殺人事件も、今日未明に容疑者”来栖健二”が逮捕され、ここ警察署の前では多くの報道関係の人間でごった返しています。」

テレビレポーターが興奮した口調でマイクに向かっている。

「先日逮捕された勝山誠二・・・そして来栖容疑者この二人に接点はないのでしょうか？何と云ってもおかしいのは、この前警察から発表された犯人像は30歳前後の女と言う事でした。謎が謎呼ぶ警察署前から、竹下がお伝えしました。」

「ありがとうございました。警察の方からはまだ何の発表もないのですか？」

「ありません・・・ただ、三十分程前に民間の医師が刑事によって連れて来られた。との未確認情報ですが、入って来ております。」

「そうですか?! 引き続き何かありましたらお願いします……。
さて次は国会の……。」

加島礼子はテレビをけした。ここは山奥の温泉旅館である。心の傷を癒しに、行くあてのない旅をしている。

自分の罪を悔い、恩師滝川にも裏切られた格好になった。いろんな事があり、一事は自殺も考えたが出来なかった。

会社も辞めたある日、東北行きの夜行列車に飛び乗ったのである……
……とにかく礼子は現実から逃げだしかった。

「来栖が、富士見会の岸田を殺した犯人……?」

礼子はテレビをけした後、茫然と旅館の窓から、外の景色を観ていた……。

……紅葉も終わりかけ、ひとあし早い冬がもうそこまで来ていた。

(ズ)

頭を抱え床にうずくまっていた来栖が4人に気付く顔をあげる……
・それは臨港苑の地下室で現れた女の顔ではなく、柊園たちが初めて見る男の顔であった!

男は徐々に鬼のような形相へと変化し、4人を睨み付けると「こんな所に俺を閉じ込めたのはお前らか?」と、立ち上がり鉄格子を蹴りつけた!

榊原院長は、落ち着いた様子で 「君は何者だね？」

男の眉がピクリと動いた。

「俺は来栖健二だ！！　ここから出せっ！」　と叫び、鉄格子を揺すった。

その様子を眉をひそめ黙って見つめる3人の刑事！

院長が何事も無かったかのように落ち着いた声で 「君は、一枝と言う女を知っていますか？」と鉄格子に近づいたとき、鉄格子の間から男の左腕が伸び、院長の髪の毛をつかむと鉄格子に引き寄せた！

男はそのまま右腕を院長の首に回し言った。 「おまえ！　死ねえ！！！」

院長は右腕と鉄格子に挟まれる形になり身動きが取れない・・・3人の刑事は何とか引き離そうと3人がかりで引っ張ったが、男の力は半端なものではない、まるで石のように固くピクリとも動かない！

院長の顔からは血の気が失せ始めている。

小林刑事が、監視官の机の上から警棒を取り、男の右ひじを何度も殴りつけ何とか救出したときには、来栖の顔に本来の穏やかさが戻っていた！

男の腕から逃れた榊原院長は、喉元を押さえ肩で大きく息をした。

来栖はふらふらと鉄格子に近づき 「先生！ 俺は・・・俺は・・・」

院長は首を左右に動かしながら 「私は大丈夫です・・・それより来栖さん、2／3質問に答えて下さい！・・・ あなたはあなた自身で2重人格であるとの自覚がありましたか？」

来栖ははっきりとした口調で 「はい！ 後頭部の痛みとともに、最初は男の声を聞きました・・・そして一枝と名乗る女の声も・・・先生！ 俺は一体・・・」

院長は軽くなづき 「来栖さん・・・あなたは正常です！ なぜなら、もしあなたが2重人格なら、他の人格が現れた時に本来のあなたは他の人格により眠らされているはずなのです・・・なのに声が聞こえたと言うことは、あなた自身は2重人格ではないと言う証です！」

来栖は、俯いていた顔上げ 「そ・・・それじゃ・・・なぜ？・・・」

来栖の間に佐古田が口を開いた。 「これはお前が生まれてすぐに行われた分離手術のときのカルテだ！」 と、鉄格子の間から差し入れた。

来栖はカルテを読み終えると、その場に崩れ落ちた！

佐古田は 「来栖！ それがお前の中の女・・・一枝の正体だ」と、小さくつぶやくように言ったのだった。

その後、院長とそのスタッフによる48時間に渡る観察が行われた！

そして翌日の午後・・・佐古田と榊原院長は会議室で、向かい会っ

て座っていた。

佐古田は用意していたお茶を出す。「ご苦労様でした！」と、院長の前に腰をおろした。

佐古田が口を開きかけたとき、もみ上げをつまみながら枡園が入ってきた。

佐古田は枡園の眉間のしわを見て「まっさん！ 疲れがたまってるようだな・・・少し無理してるのと違うか？」と、気遣うように言った。

枡園は椅子に腰を下ろしながら「いやいや・・・このくらい・・・ちよっと中村課長と話してて遅くなった・・・それより、来栖の様子はどうでしたか？」と、院長の顔を見る。

院長は出されたお茶を飲み“ハッ！”と、大きく息をはくと「彼には昨夜のうちに何度も3人の人格が入れ替わり現れました！そしてその3人の話の内容から今回の事件の全貌が見えてきました。」

佐古田は頭を掻き回し「3人の話・・・それでは、来栖だけでなく一枝と男の人格からも話が聞き出せたんですか？」

院長はコクリとうなづき「はい！結論から言います・・・・殺人は一枝ではなく、もう1人の男の人格・・・ややこしいので、一枝の分身という意味で彼の名前を一男とします！その一男が全て行った事なのです！」

佐古田と枡園は互いに顔を見合わせた。

院長は 「では、順を追って話しましょう！」 と立ち上がり、ホワイトボードへと向かったのであった！

榊原院長の協力で、来栖が関わった事件の報告書が出来上がった！

公園浮浪者暴行事件

当時、来栖健二の頭の中で一枝の脳が成長過程にあった。一枝は成長とともに健二に成り代わり、表に現れようと考え、不定期ではあるが表に現れるようになる。

そのたびに健二は身に覚えのない嫌疑をかけられ、それにつれ徐々に生活が荒れてくる・・・一枝は異常なほどに酒を嫌う・・・一方、健二は自身の荒れ果てた生活の現実から逃れるため、酒に溺れていた！

浮浪者に暴行を受ける健二・・・身体を共有する一枝は痛みを感じていたが、前日の酒が残っていたため、じつところえていた！

一枝は自身の存在を生まれながらに否定され続けた事と、酒のため自身の存在を殺し続けた事にストレスを感じ、そのストレスが解離性同一性障害の引き金となり、男の人格（一男）を生み出す事となる。

一男は抑圧された一枝の怒りそのものであるため、狂暴な人格として現れ浮浪者を叩きのめしたのである！

富士見会・岸田杜雄 殺人事件

来栖健二は富士見会の経営する富士見ローンに借金の申し出をする、

岸田杜雄と一男とは面識があったため、岸田は健二を一男だと思い承諾する。しかし、仕事の無い健二からは支払いが無いだけでなく、連絡さえとれなくなり、岸田は健二の居場所をさぐりあて、臨港苑に出向いた！

そのとき健二の中に一枝が目覚めていたが、岸田の目には女装した来栖としか映らなかった。

岸田の事を知らぬ一枝のはぐらかすような返事に岸田は怒りを露にした。

岸田に殴られ、まだ不安定な一枝の人格は一男へと入れ替わった・
・・そばにあった果物ナイフで背中から一突き、ナイフは心臓に達した！

しばらくの後、一枝の人格が目を覚ました・・・そこには背中にナイフが刺さったままの岸田の遺体が・・・

一枝は自分が殺したと思い込んだ。 処分しなければ・・・“
せつかく健二と入れ変わることが出来ても死刑になるかもしれない”
・・・そう考えた一枝は、押入れにあったボストンバックに岸田の遺体を押し込んだ・・・だがどうしても頭部だけが収まらない！

一枝は、臨港苑の今は使われていない浴室で頭部を切断！ 頭部は怨恨を匂わせるため、口に天罰と書かれた紙を押し込み、紙袋に入れた。

遺体を公園の滑り台に遺棄すると、一枝は臨港苑へと帰り、本来の人格来栖健二に戻る。

カラオケボックスでの山下舞子暴行事件も同様に、一枝の中の一男が引き起こしたことであり・・・逮捕されるが、心神喪失と診断され釈放される。

青木雪乃婦警・監禁および殺人未遂事件

一枝は来栖健二を尾行する青木雪乃婦警に気づいていた。

一枝は、自分の犯した岸田殺害に気づいた雪乃が、自分を尾行していると勘違いしたのである！

かすみの献花台に手を合わす来栖に幻影を見せ、隙を見て入れ替わった一枝は、雪乃の横を通り過ぎ、振り向いた雪乃の腹にひざを打ち込んだ・・・そして、臨港苑の地下室に監禁し、ボーガンでセツトした！　ボーガンは本来の来栖が趣味で持っていたもので、タイマーは臨港苑の厨房の旧式グリルにつけられていたものを代用した。

現在、一枝の脳は健二の脳の大半を支配し、一枝として過ごす時間が長くなり・・・それとともに一男の人格は現れなくなっている！

(な)

来栖(健二・一枝)の取り調べはまだ続いていた。先日、報道各社には共同記者会見を開き新藤警視と榊原医師が会見をした。

テレビ・新聞は大々的に報道し、ワイドショーのレポーターは狂気乱舞している。それほど、この異様な事件は世間の関心をあつめていた。

「先生、来栖はこの先どうなるのですか?!」

榊原心療病院の応接室で、柊園と榊原医師が向かい合ってお茶を飲んでいる。

「分かりません……。ただ、永くは生きれないと思われます。」

榊原は湯呑を手で弄びながら、「警察は健二で起訴するのですね! ?。」と続けた。

「……そう、なると思います……。」

柊園は渋いお茶を一気に飲み干し、顔を歪めて榊原医師を見た。

その頃一人の男が警察署で、来栖に面会を求めている。

「大学の先生が?! 来栖に何の用です?。」対応した春日婦警が、渡された名刺を見ながら聞いた。

「私は探偵事務所も経営してまして、来栖健二にある依頼を受けているのです。」

「どうした春日主任?。」

捜査一課長中村は、通りすがりに声をかけた。

「この方が……来栖に面会したいと……。」と春日婦警は眼で

合図した。

中村は男を見た・・・「白羽先生・・・?! 来栖を知っているんですか。」

中村は思わず大声を出した。

「お久しぶりです、中村さん。」そう言って白羽は頭を下げた。

面会室で白羽と来栖健二は向かい合った。来栖は後ろ手に手錠を掛けられていて、三人の警官が後ろに控えている。

「私を覚えているかい？」 白羽は優しく聞いた。来栖は無言で頷くと、真正面から白羽を見た。

「警察の発表と私の考えが、一寸違う所があってね、そのあたりを少し君に聞きたくて、ここの刑事さんに無理を言ったのだよ。」

白羽はそう言って、自分の後ろに腰かけている小林刑事を見て、また話し始めた。

「今は健二君だね?!・・・君は、向坂かすみさんを今でも好きかね。」

無言で健二は頷いた。白羽は指を鳴らして、「かすみさんが、秋葉と岸田によって犯されるDVDを君は観たんだね・・・」と言った。

健二の頬を涙が流れていた。

「岸田を殺したのは、健二君・・・きみだね。」

白羽の言葉は優しかった。

来栖健二の、頬を濡らし続ける涙がすべてを物語っていた……。

「そして、君は岸田の首を切り落とし、復讐の意味で口の中に天罰と書いた紙を入れて、メゾン・ド・ソレイユから見える公園のすべり台の上に放置したんだね……すべては、向坂かすみへの罪滅ぼしの為だね。」

白羽の口調は最後まで優しかった。

来栖健二は大声で泣いた。そして、自供を次のように翻した。

”私のせいで自殺したかすみ、哀れで成りませんでした。そんな折、あのDVDを観たのです。私はかすみの為に、いや自分自身のかすみへの後ろめたさの為に、秋葉と岸田を殺す事を考えたのです。”

そこで、一度健二は言葉を切り涙をぬぐった。

「しかし、秋葉はかすみと一緒にビルから飛び降りた。」 白羽が口を挟んだ。

「あの時は神様は居るのだと思いました……そして、ある日の事ふと気付くと目の前に岸田が居ました。事もあるうに、私の手には包丁が握られていたのです。躊躇することなく私は、後ろから岸田の心臓を貫きました……私は、多重人格だと自覚してましたから、女の人格の事も薄々感じてましたので、女装して岸田の死体をかすみの住んで居たマンションの見える場所に放置したのです……。」

そう言って、来栖健二は溢れる涙を拭おうともせず机にひれ伏すのであった。

「よく言ってくれました、これで、私もスッキリしました。」

白羽は立ち上がると、泣き伏している来栖と小林刑事に一礼して面会室を後にした……。

「ハッハッハッ……だから私は無実と言ったじゃない……。」

白羽の背中に、一枝に変わった来栖の勝ち誇った笑い声が響いて来たのだった……。

(ズ)

小林は白羽を見送り、中村課長と話していた。

中村は「そうか……つまり榊原院長の話と白羽さんの推理を合わせて考えると、青木君の監禁については一枝ではなく、来栖が一枝のフリをして証言していたというわけか！」

「そのようですね……本来二重人格は片方が活動すると片方は寝ている状態になって互いの行動は覚えていないのが普通らしいですけど、来栖の場合は……しかしややこしい事件ですね！……。」
「と、小林は中村の顔を見た。

中村は手のひらで自分の後頭部をトントンとたたきながら「私もいろんな事件を見てきたが、これほど異様な事件ははじめてだ……。」

「健二で起訴するということですけど、榊原院長の話では一枝である時間のほうが長くなってるらしいですが・・・来栖はいったいどうなるんでしょうか？」と、小林が力なく言う。

中村は 「小林君・君の気持ちはわかるよ・私だって同じだ！
いったい誰が悪で誰を罰したらいいのか・・・あとは検察官に任せるしかないな」

中村の言葉に小林は軽くお辞儀をすると部屋を後にした・・・

解決編・3 来栖逃走（前書き）

ズラえもん・ながいわれ・ゴジラ 三人の共作です。
（ ）の中は作者の頭文字です。

解決編・3 来栖逃走

(な)

白羽は心理学の講義を終えて、東関大学のキャンバスを出た。

もう季節は秋から初冬に移り変わっていた。公園の中を白羽はコートの襟を立てて、足早に歩いていた。

公園のベンチに、どこかで見た事がある、初老の男がうつむいて座っている。

「柊園さんでは・・・？こんな所で、何をしているんですか。」

白羽は近寄って声をかけた。

柊園は白羽に目を向け、「ああ・・・」と、言って話し始めた。

「向井と言う刑事が私の下にいましたね。あの教会で先月の終りに結婚式を挙げるはずだったのです。」

柊園は公園の遥か向こうに、屋根だけが見える教会を指差した。

白羽は黙って柊園の指先を見た。

「この頃歳を取ったせいかな、刑事の仕事が辛いのです。」

「・・・・・・・・・・。」

「来栖にしても、可哀そうな奴です。云わば来栖健二は被害者と言

「つっても、過言では無いのですよ。」

柊園はそう言って、白羽の顔を見つめた。白羽は優しく微笑みながら、「あなたは、疲れているのですよ。この事件が解決したらゆつくり温泉でも……。」

「あなたは私の事なんか、何も分かっていない！」突然柊園は大声を出した。

「……あなたは確かに名探偵かも知れない。一寸した事から全てを推理して、真実を引き出し犯人を追いつめる。」柊園はベンチから立ち、足もとに落ちていた煙草の吸殻を拾ってまじまじと見つめた。

「あなたの真似をしてみましようか!？」「そう言って柊園は白羽の方に向き皮肉めいた笑顔を見せた。

「この煙草を捨てた人物は……男で多分メガネをかけている。年の頃は五十歳前後で頼り無さそうな感じを受ける。」

そこで、柊園は一度白羽を見た。

「………まずどの……さん……?!」白羽はうろたえていた。

「……なおも柊園は続けた。

「失業中で、今は職探しをしているがなかなかみつからない……。」

そう言って、柊園は吸殻を捨てた。

茫然としている白羽をもう一度見て、柊園は話しだした。

「・・・あなたが来る数分前、私の横で、今私が話した男が煙草を吸っていたんだよ・・・そして、私に自分の事を話して、また職探しに何処へともなく行った・・・」

・・・刑事の仕事と云うのは、理屈や理論では無いんだ。足で歩き、目で見た一つ一つの事実の積み重ねなんだよ。」

そう言って、柊園はもみ上げを触りながら警察署へ帰るべく歩いて行った。

白羽は力無く歩く柊園の後姿をいつまでも、見送っているのだった・・・。

(ズ)

時が経つにつれ、来栖の中の一枝は人格も安定し、鋭く輝やいた眼光も穏やかな優しい色へと変わり、その容姿もまた妖しさから美しさへと変わって行った！

そして、来栖健二が検察庁へ移送される日がやってきた！

表には所狭しと、朝から報道陣が待ち構えている。

中村課長に榊原院長から、最後の報告がなされた！

「現在来栖は移送には何の問題もないと思われます！・・・中村さん！今の来栖を見て何か気が付きませんでしたか？」

中村は首を傾げ 「いやいや・・・私ども素人目にはどちらが現れているのか皆目見当すらつきません！」と頭を掻いた。

榊原院長は自分の口元に手をあて「ヒゲですよ・・・来栖のヒゲが目立たなくなっています！もうほとんど一枝の脳が主導権を握っている証です」

「なるほど・・・いわれてみれば・・・！ しかし、考えてみれば一枝は可哀想な女ですねえ！ 体を持たぬ脳だけとはいえ、一人の人間・・・いや女としての感情を持ちながら、やっと生まれ変わったと思えば余命はわずか・・・」中村はやり切れぬといった様子でつぶやいたのであった。

静かに目を閉じ、壁にもたれ掛かっていた一枝の前に2人の制服警官がやって来た。

“ガチャガチャ”と鍵を開ける音が冷たいコンクリートに響き渡る・・・

「さあ！ 行こうか・・・」制服警官の1人が一枝に声をかける。

腰にロープをかけられ、両脇を2人の警官に支えられながら、一枝は護送車の待つ表通りに姿を現した。

数名の警官が行く手を阻む報道陣達をかき分け通路を確保したそのとたん、ストロボの閃光が3人を包んだ！

一枝の両脇にいた警官が眩しさのあまり片手を目の上にかざした・
・その一瞬を待っていたかのように、一枝は2人の警官を突飛ばし
駆け出した。

一枝はざわめく報道陣の隙間をかき分け表通行に出る！

“一枝が逃走したぞ！” 警官の叫び声はカメラのフラッシュと
早口でまくし立てるレポーターの声にかき消されていた。

中村課長は無線のハンドマイクを握りしめ近くにいるパトロールカ
ーに緊急指令を出した「一枝が逃走した！ 表通行を駅方面に向
かっていると思われる・・・何としてでも取り押さえろ・・・！！」

“ガチャン” と大きな音を立ててマイクを置いた中村に、そばで
聞いていた白羽が思いついたように”パチン“と指を鳴らした。

「中村さん・・・一枝の行き先はあそこしかありません！」

中村は驚いたように振り返り「あそこ？・・・あそこ・・・とは
？」

白羽は、それに答えず「先回りしましょう」と、中村を促し
部屋を飛び出したのであった。

方々から響いて来るパトカーのサイレンを聞きながら、一枝は必死
に走った・・自分に死期が近づきつつあることを身体の不調から感
じ取りながら！

息を切らし、よろめきながら・・・ただひたすら走る一枝のほほ
を、一筋の涙が伝う。

白羽とともに車に乗り込もうとしていた中村を呼び止める声がした！

そこには柊園警部補が真剣な面持ちで立っていた・・・「課長！私に行かせてください」と、軽く頭を下げ車に乗り込んだ柊園の目が、何かを語りかけていることに気が付いた中村は、無言で大きくうなずいたのだった！

走り去る車を見送った中村は心の中で呟いた “ まっさん・・・あんたも私も、刑事としては失格だな！”

一枝は線路脇にある車のスクラップ置場へとたどり着いていた。

積み上げられた廃車の間を掻い潜り、マイクロバスの中に身を潜めると、腰に巻かれたロープを外した。埃だらけのシートに身体を投げ出し、目を閉じ息を整える。

一枝は足下に転がっていた、バックミラーを拾い上げた。

透き通るほどに血の気が失せた自分の顔が映っている。

じっと見つめる一枝・・・両手でそつとほほを撫でてみる！

“ 生きてる！・・・わたし・・・生きてるんだ！！ ” 一枝は思わず呟いていた。

制服警官の運転するパトロールカーの後部座席に、柊園と白羽は並んで座っていた。

白羽は柊園の顔を覗き込み 「警部補・・・あなたは、なぜ来栖の行き先を・・・？」 とたずねた。

柊園はもみ上げをつまみながら 「白羽さん！ 今、来栖が健二であれ一枝であれ、脳は一つになりつつある・・・ということは、健二の記憶は一枝の記憶に変わっていくはずだ・・・かすみさんを失った悲しみもね・・・すなわち、どちらの人格が主導権を握っている、来栖は必ずあの場所に向かうはずです・・・ちがいますか？」

柊園が制服警官に言った 「そこで止まってくれ！」

車は左に寄り停止した・・・そこは白羽探偵事務所であつた。

柊園はもみ上げをつまみ 「白羽さん！ ここで降りてもらえますか・・・あとは私が・・・」

白羽は黙ってうなづいた。

一枝は、そつと目を閉じ耳をすませた。

遠くから聞こえていたバトカーのサイレンの音がいつの間にか聞こえ無くなっている！

一枝はそのまま眠っていた！

一枝は夢を見ていた・・・10才くらいの子供が集まり、鬼ごっこをしている。 ほほを真っ赤にした女の子が顔をクシャクシャにし

て笑いながら 「あははっ！ こんどは一枝ちゃんが鬼だよ。」
と言うと、一枝は右手を大きく上に上げて 「みんな、境内から
出たら出た人は負けだからね！」と、大声で叫んだ。

「いーち・にーい・さーん・しーい・」 一枝が松ノ木の陰で
目をふさぎ数え始めると、子供達は思い思いに身を隠す！ 「・・
きゅーう・じゅーう！ もーういいかい！」 一枝が目を開
け叫ぶ・・・「もういいよ！」 あちらこちらから答える声が
響く・・・一枝は寺の境内を探して歩いた・・・縁の下を覗き、
物置小屋を開けて見る・・・1人見つける度に楽しげな笑い声が響
く！ 日が暮れるまで遊んだ・・・「かずえー！ かえって
おいでー」 母の呼ぶ声が聞こえてくる！

眠っている一枝の顔に笑みがこぼれた。

健二の体験した様々な出来事が、まるで一枝自身の体験の如く置き
換えられ、次から次へとうかんで消えて行った！

どのくらい眠っただろう・・・目を覚ますと辺りは暗く、割れたフ
ロントガラスを通して明かりがまばらに灯ったマンションが見える！

一枝は考えた挙句、自分の中に眠っている健二に語りかけた “健
二・・・健二・・・起きなさい！”

健二が目を覚ます・・・ “その声は一枝？ どうしたんだ？
お・・・俺は・・・？”

一枝は “健二・・・この身体、あんたに返すわ・・・私はあんた
とともに生きてきたんだもの、たくさんの思い出があるんだもの・
・身体なんていらぬ・・・” そういうと一枝の声は聞こえ

なくなつた！

(な)

大都会にまた夜がやって来た・・・

・・・来栖は高層ビルの下にある献花台に手を合わせた。

「かすみ・・・今でも愛しているよ。」

一輪の花を手にとって、

来栖は高層ビルの屋上へと続く階段を登って行った。

警備員に邪魔をされるかと思ったが、警備員の姿は見えなかった。

来栖は屋上に立って夜空を見上げた。

満月と満天の星が来栖に降り注いでいる。

” かすみ・・・お前が飛び降りた時も、確か満月だったな・・・。”

来栖は、金網に近づいて行った。

「来栖、待っていたよ・・・。」 後ろで、柊園の声が聞こえて来た。

来栖は、びっくりして振り向いた。

「く、来るな〜！・・・飛び降りるぞ〜っ！！」

柊園は自分の息子を見るような優しい顔で来栖を見ていた。

「・・・飛び降りる気でここに来たんだろう!?。」

柊園の声は、全て分かっていると云った口調だった。

高層ビルの屋上で、老刑事と逃走犯は一定の距離を保ったまま、動こうとはしなかった。

二人の遙か前方を光の線となって、電車が通過していた・・・。

(ズ)

中村課長は自分のデスクに座り唇を噛み締めていた・・・
その手には、“辞職願ひ”と書かれた封筒が握られている!

「まっさん・・・!!」

中村は立ち上がり、窓から外を見る・・・そこにはクリスマスのネオンに彩られた大都会の夜が広がっていた。

柊園はもみあげをつまみ優しげな口調で語りかけた。

「私はもう刑事ではない・・・君を捕まえるつもりもない!ただひとつ確認したかったんだ・・・君のかすみさんへの愛を・・・」

柊園はくると向きを変えると階段に向かって歩きだした。

「来栖・・・月が・・・月がきれいだな・・・」

健二には階段を降りる柵園の背中がわずかに震えて見えた！

健二はフェンスの向こう側に立っていた！ “ かすみ・・・かすみ・

・ ” 何度もうわ言のように繰り返しながら・・・もう健二を阻むものは何もない ！

柵園は、向井の献花台の前に座っていた・・・屋上に月に照らされた来栖の姿がシルエットとなって見える！

もみあげをつまみながら心の中で語りかける

“ 向井・・・俺は間違ってるか？ ”

健二は、足下に広がった空間に背を向け目を閉じた、その時 “

健二・・・ごめんね！・・・ ” 頭の中で一枝の声が聞こえた気がした・・・

健二はつかまっていたフェンスから手を離れた・・・大粒の涙が水玉となって宙を舞う！

後ろ向きに落ちながら、持ってきた一輪の花を夜空に放り上げると、最後の言葉が来栖の口から発せられた！

「ありがとう・・・お姉さん・・・」

クリスマスのムードに浮かれた大都会の夜を、満月がやさしく照らしていた！

(な)

・・・テレビポーターは、興奮した口調で喋っている・・・。

「昨夜遅くに、逃亡していた来栖健二は一連した高層ビルから、身を投げ自殺しました。」

「どうして、来栖容疑者はそのビルから身を投げたのですか・・・？」

ワイドショーの司会者は、視聴者の当たり前の疑問を口にした。

「はい、どうやら一番最初にここから飛び降りた、向坂かすみさんの彼は恋人だったらしいのです。」

「ああ、それで追い詰められて後を追ったのですか?!」

司会者は納得して首を二・三回縦に振った。

「いや、それがちょっと違うみたいなんですよ・・・」

「違うと言いますと・・・?!」司会者はわざとらしく怪訝な顔をした。

「このビルからは数人が飛び降りており、最近では警備員が屋上に行けないようにしていたのですが・・・」レポーターは興奮している。

「なぜ、来栖容疑者は簡単に行けたのですか・・・？」

「それがですね、ちょっとお聞きください。・・・以下は独占イン

タビューに成功した警備員の話です。」

” 私がいつものように警備してますと、刑事だと云って年老いた男が話しかけて来たのです。その刑事が言うには、今を騒がす逃亡犯がこのビルに逃げて来るので屋上に上がる邪魔はしないように・・・”

「そう言われたようです。しかし、” おかしい ” と思った警備員は、来栖が屋上に上がって来て、飛び降りるまでの一部始終を見ていたそうです。」

そこで、レポーターは言葉を切り衝撃的な言葉を続けた。

「なんと、その老刑事は来栖の飛び降りようとするのを止めるどころか、飛び降りを進めるような言葉を言ったらしいのです・・・・・・」

「・・・・どう言う意味ですか・・・？」

「つまりですね、躊躇している来栖容疑者に早く飛び降りて楽になれと・・・・。」

白羽は、テレビのスイッチを切った。

枳園の人の良い、優しい顔が脳裏を駆け巡って、白羽は苦々しくコーヒーを飲み干した。

(ズ)

数ヶ月後・・・

相次いだ投身自殺の現場となったマンションは入居者も無く、取り壊しの工事が進められていた！

マンションの裏手となる線路脇の草むらに埋もれるように転がる丸い石・・・富士見会、秋葉剛の無縁仏である。

秋葉を除く自殺者たちの献花台は取り去られ、警察関係者と近隣の住民の協力で立派な慰霊碑が建てられた。

夕暮れ時、白い花束を抱えた一人の老人が手を合わせている。

慰霊碑には、道行く人々の手から贈られたあふれんばかりの花束に埋もれるように、悲しき定めを背負い死を選んだ者たちの名が刻まれている！

老人は刻まれた名前を一人ずつ声に出して読んでいた。

” 向井直哉 ” ” 向坂かすみ ” ” 来栖健二 ” ” 来栖
一枝 ”

老人は最後に刻まれていた一枝の名を確認すると、優しい目をしてうなづきながら、白くなったもみ上げをつまんだ！

エンディング 柊園の手紙（前書き）

ズラえもん・ながいわれ・ゴジラ 三人の共作です。
（ ）の中は作者の頭文字です。

エンディング 柊園の手紙

少しだけ過去へと戻る……それは、そう……向井刑事の四十
九日が過ぎたころ……

(な)

並木 恵は疲れ切っていた。

婚約者を殺され(犯人は不起訴)、同じように元恋人を失った男に
は、襲われかけた。

もう、何を信じていいのか分からなかった。

「故郷へ帰ろう……。」 恵は青森行きの夜汽車に乗った。

恵の故郷は岩手県花巻市の郊外に、老いた父親と母親が住んでいる。

”次は宇都宮。” 列車内にアナウンスがこだました。まだ上
野を出て一時間と少しである。

恵は列車の窓から夜空を見ていた、上野を出た時には目映いくらい
のイルミネーションが映し出されていたが、今窓の外に見える景色
は真っ暗な夜空と、窓に映った自分の顔だった。

また、恵の頬を涙が流れた……向井の死は、恵の心に大きな穴を
あけていた。

「どうかしました、気分でも悪いのですか？」通路を挟んだ隣の席の女性が声をかけてきた。

年の頃は30前くらいか、白いドレスが似合う色白の美人だ。

「云え、大丈夫です。亡くなった婚約者の事を思い出していたもので・・・」

「まあ！婚約者を亡くされたのですか？事故ですか？」白いドレスの女性は身を乗り出してきた。

「高層ビルから身を投げたのです・・・自殺と処理されたのですが、この前犯人が捕まりました。しかし、不起訴に成ったのです。」

「まさか・・・婚約者と云うのは向井という刑事さんではありませんか！？」

”なぜこの女は、直哉の事を知っているのだろう・・・？”
恵はまじまじと顔を見た。

”どこかで・・・” 恵は首を傾げた。

「ちょっとお手洗いに」と、逃げるように女は席を立てて前の車両に消えて行った。

いつの間にか恵は寝ていた・・・夢の中で直哉が笑っている。

恵はウエディングドレスを着て、父親とバージンロードを歩いている。

父親と直哉が入れ替わる、恵は直哉の顔を見た。

直哉の顔が来須に変わり、獰猛な笑みを浮かべていた……。

”ガタン”と列車が揺れ、恵は目を覚ました。

心臓が早鐘のように鼓動している。何か怖い夢を見ていたのは覚えているのだが、どんな夢かは思い出せなかった。

斜め右前方に座っている三人連れが目映った。何か異様な感じがして、恵は神経をそちらに集中させた。

”いつから居たのだろうか、気付かなかった。”恵の方に顔を向けて座っているのは、窓際の方に二十歳前の女性が帽子を深めにかぶり、じつと外を見ているのと、その横にスーツを着た四、五十歳代と見える優しそうな男性。そして、その反対側には、恵は後ろ姿しか見えないが、二十歳位のいかにも”チンピラ”風の男が座っている。

「もう、頭はいいのか？」横に座っている男が聞いた。

「……はい……」蚊の鳴くような声で女が答えた。

”アツツ”と恵は思った。”あのカラオケボックスで来栖にジョッキで頭を殴られた店員の娘だ。”

「舞子……お前は三百万で両親に捨てられたんだよ。」と、チンピ

ラ風の男。

舞子は十五の時に母親が病死して、その半年後に父親は行きつけのホステス嬢と再婚した。義理母は酒癖が悪くいつも舞子につらくあった。情けない父親は見ぬ振りをしていた。

十七の時。舞子は家を捨て東京に出て、あの事件の日まで一人で頑張ってきたのである。

「とにかく、三百万で両親はお前を富士見会に売った。その金と引き換えで、来須の告訴を取り下げさせた。あの男は、まだまだ利用価値があるのでな・・・。」横に座っている男が言った。

「健、後どれくらいで着く?!」健と言われたチンピラ風の男は腕時計を見て、「五藤さん、あと十分くらいです。」と、答えた。

恵は悟られないように会話に耳を傾けていた。

”あの娘、これからどうなるのだろうか?” 恵は責任を感じていた。

その時、恵には信じられない言葉が聞こえてきた。

「私は絶対あの女を許さない・・・あの女の身代わりに私は成ったんだ!」

舞子の両目から涙が溢れていた。

富士見会の二人は思わず顔を見合わせている。

夜汽車はスピードを落とし始めていた。「そろそろ着くぞ。」五藤は立ち上がった。健も立ち上がり舞子の手を取って立ち上がらせた。

舞子と恵の目が合った。”あつ”と云う顔を舞子がしたように思え、慌てて恵は目をそらした。

舞子が恵の横を通り過ぎようとした時「こ・ろ・し・て・や・る・・・。」と言う舞子の小声を恵は聞いた。

「何か言ったか?！」五藤が振り向いて舞子を見た。

恵は三人が列車から降りるのを、茫然と見送っていた・・・・・

「殺してやる!　ころしてやる!　KOROSITEYARU!　!　ころして・・・。」何度も舞子が言った言葉が恵の頭の中でこだましていた。

・・・夜汽車は何事もなかったように、傷心の恵みを気遣う事無く、規則正しいリズムを刻みながら動き出していた・・・。

(ズ)

恵は抱えていた直哉の写真をひざに置き、窓側に置いていたバッグに目線を落とした。

バックの口が半分ほど開き、黒い携帯端末が顔を覗かしている!

「あら？・・・あっ！　そうだ・・・！」　恵は端末に手を伸ばした。
直哉の写真に見せながら語りかける。

「なおや・・・これあなたのよね？　あなたがお世話になった耕園さんに挨拶に行ったとき、春日婦警があなたのじゃないかって見せてくれたの・・・落し物として保管されてたのよ・・・私、すぐあなたの物だってわかったわ。　ほら、ここの傷・・・私がうっかり落としたときに出来たのよね・・・」

写真に語りかける恵みのほほに涙が伝っていた。

駅の改札を抜けると、五藤伸二郎は表で待つリムジンへと向かった、三村　健は舞子の右腕をしっかりと掴み後からついてくる・・・

五藤は運転手の手で開け放たれたドアの前に立つと、健のほうに振り返り　「健・・・お前ははこのまま総会に向かってくれ・・・だ
が忘れるな！　お前はあくまでも俺の代理だ、新組長にくれぐれも粗相のないようにな！」　と、懷から無造作に取り出した札束から30枚の一万円札を健に手渡した。

「えっ！・・・で・・・でも・・・今夜の総会は葛原組くずはらの二代目の挨拶が・・・それにこの女は・・・」

五藤は戸惑う健をリムジンに押し込むと　「女は俺が連れて行く！」
と舞子を引き寄せ　「健！　よく覚えとけ、こんな遅い時間に集まる総会では、ごく親しくしてるものだけの集まりで、挨拶なんざあく形だけのモンよ・・・明日の襲名披露には真っ先に駆

けつけると言っといてくれ。」

今にも泣き出しそうな健を乗せリムジンは遠ざかっていった！

リムジンが見えなくなると五藤は舞子の腕を離し 「ご苦労だったな」 と、肩に手を回した。

力なく一点を見つめていた舞子は、五藤の言葉に顔を上げると ”ふうっ！” という声とともに息を吐き出し、五藤を見上げニッコリと笑った！

舞子は自分から五藤の腕に自分の腕を絡め 「どう！ うまいもんでしょ・・・私の芝居！」

五藤は 「フッ” ああ驚いたぜ・・・おかげで周りの視線が突き刺さるようだった・・・で、あの女は例のものを持っていたか？」

舞子は 「バックの中にあったのがばっちり確認できた・・・あれは、あの刑事が持ってたものよ！」 と、五藤を見つめた。

二人はタクシーに乗り込んだ。

目を閉じて五藤に寄りかかる舞子 「でも、どうしてこんな事・・・？」

五藤は 「・・・まあ、お前にもそのうちわかるさ！」 と、舞子の肩をやさしく抱いた。

いつもと変わらぬ夜の街を、二人を乗せたタクシーが通り過ぎていった！

(な)

女は男の隙について背中から包丁を刺した。

男は小さな呻き声をあげて、「……まい……こ……。」と呟きその場に崩れた。

「五藤さん！どうしました？。五藤さん……ドアを開けますよ。」

二、三人の富士見会系のチンピラがドアを叩きながら叫んだ……。

(ズ)

入り口のドアは蹴破られた……。女は男たちに何か言おうと立ち上がりかけたが、その声は五藤に駆け寄る三村たち3人の男の声にかき消された。

「このアマ……！裏切りやがったな……！」

“バン……バン！” 振り向きざまに三村のピストルが火を噴いた……。舞子はその場に崩れ落ちる。

ナイフを握り締め、舞子はうつぶせに倒れこんだ！

葛原星一はソファーに座り足をテーブルに投げ出したまま、入ってきた三村健に言った。

「どうだ……？ 五藤と女は始末したか？」

三村は頭を下げたまま 「はい！ 間違いなく、五藤の兄貴も姉さんも……。」

葛原はニヤリと口元をゆがめ 「そうか！ ごくろうだった！
これで富士見会は俺様のものだな・・・！」 と、三村にタバコを
差し出した。

「ありがとうございます！ 私はこれからすぐ警察に自首してきま
す・・・葛原組長！ 例の件どうぞよろしくお願いします。」
そう言うのと三村は、タバコに火をつけ胸いっぱい吸い込んだ。

葛原は何度もうなずきながら 「わかってる・・・安心して勤めて
来い！ 帰ってきたらお前は葛原組の幹部として迎えてやる」
葛原星一はタバコをくわえた口元を歪め、にやりと笑った。

（な）

枡園は来栖の取り調べの途中に部屋を出て捜査課の自分の椅子に座
り込んだ。

「どうしたまっさん?!。」 中村課長が聞いて来た。

「・・・いえ、ちょっと・・・今までの事を思い出しまして、私も年で
すかねえ。」

枡園は力無く笑って立ち上がった。

「来栖の調べに戻ります。」 そう言ってもみ上げを触った。

その時、捜査課のドアが開き若い刑事が息を切らせて入って来た。

「課長！ 今、福島県警から連絡があり富士見会の幹部五藤が殺害さ

れたとの事です。」

「何い！どういう事だ？。」

中村の大声が飛んだ。若い刑事は、枅園を横目で見てメモを読み始めた。

「福島県いわき市のアパートで、昨夜富士見会幹部 五藤伸二郎が情婦に背後から包丁で刺され、今日未明病院で死亡が確認されました。尚、犯人の情婦 山下舞子はその場で五藤の舎弟、三村 健に射殺され三村は福島県警に出頭したとの事です。」

「秋葉、岸田に次いで五藤も死んだのか！よし、もう富士見会はガタガタだ、一気に潰しにかかろう。新藤警視に連絡して特捜班の編成だ。」

中村課長は気色ばんだ。

若い刑事もすぐ捜査課を飛び出して行った。

” まいこ・・・？ ”

枅園はどこかで聞いた名前だと心で思いながら捜査課を出て、来栖の取り調べ室へと急いだ。

そして、話は現在に戻る

(な)

” 前略枅園様

お元気ですか?! 私は今、北海道の田舎町に住み込みで働いています。

世間を騒がした一連の事件も、来栖健二（多重人格者だったのでね）の自殺で幕を閉じ、あの高層ビルも取り壊されたみたいです。

直哉も天国から事件の解決を喜んでいる事でしょう。

私が働いて居る所は”喫茶ひまわり”と云って、オーナーの模子ママに弘美さんという可愛いウェイトレスが働いて……………。

カラーン・カラーン

喫茶店のドアが開いて二人連れの客が入って来た。

「いらっしやいませ……」 並木 恵は枅園への手紙を書く手を止めて、おしぼりを用意した。

今は恵ひとりで留守番中だ。二人とも黒系統のスーツを着こなして、スジモノの匂いを漂わせている。

二人の客はコーヒーを注文して、何やらひそひそ話を始めた。

「お待ちどうさま。」

恵はコーヒーを二つボックスに置いた。二人の男達は会話をやめて恵が去るのを待った。

「ごゆっくりどうぞ・・・」

恵はカウンターに戻って、皿洗いを始めた。

”五藤が殺され．．．富士見会．．．女．．．端末．．．北海道に．．．
 ．葛原二代目．．．．．”

皿を洗いながら、恵は先程所々聞こえた会話が氣に成っていた。

”女、端末、北海道……”それに、五藤と言う名前にも何所かで聞き覚えがあつた。

二人の男達は、暫く話していたがその内容は恵には聞こえなかった。

「ねえちゃん・・東京から来た女を、この辺りで見なかったかい？」

お金を払った男が店を出る時恵に聞いた。恵は黙って首を横に振った。

その後その二人組……いや、スジのものが、喫茶ひまわりに

現れる事はなかった・・・・・・。

(ゴ)

「ただいま♪」

ホテル「向日葵」の大忘年会から模子ママと弘美と胡桃が帰って来

た。

模子ママ「誰もお客さんは来なかった?・・・」

恵「はい・・・2人来ましたけどコーヒー飲むとすぐに出て行きました」

模子ママ「そう言えばさっき黒い服を着たちよつと怖そうな2人連れとすれ違ったけど」

弘美「最近の世の中物騒になって来たから村野さんに警備を御願した方がいいですねママ・・・」

模子ママ「そうね!・・・忘れない内に電話してみるわ・・・あ・・・もし村野さん近頃物騒になって来たので時々こっちの方も巡回して頂けますか?・・・」

村野警部補「ああ!模子ママ、忘年会はどうだったね!盛り上がったかね・・・うん・・・はいはい・・・わかった!・・・1時間置きに見回りしよう、他ならぬ模子ママの頼みだから」

模子ママ「助かるわ!・・・じゃ、御願います!」

村野警部補「ジョンも常時付けておくか、おやつにたまに砂肝を上げてくれるかね?」

模子ママ「はい!ありがとうございます!」

弘美「良かったですね!ママ、恵さん」

恵「そうですね！」

模子ママ「あら・・・だれかに手紙を書いていたの・・・彼氏??」

恵「いえ・・・そんなんじゃないです・・・ちよっと・・・」

照れくさそうに顔を赤らめてそう言えながら柗園刑事に手紙の続きを書いてる並木 恵であった。

(ズ)

中村課長は捜査一課の窓際に座りぼんやりと外を眺めていた・・・
”ボタン” と、ドアの開く音とともに小林刑事が入ってきた！

「課長！ 大変です・・・富士見会が・・・！」

中村は椅子ごとクルリと向き直り 「富士見会？ 富士見会が動き始めたのか？」と、小林を睨みつけるように言った。

小林は最近かけ始めた眼鏡の蔓を指先で突き上げながら 「いいえ！ 富士見会が・・・無くなってるんです!!」

中村は椅子から立ち上がり 「なに？ それはどういうことだ？

富士見会の組長の稲村忠志は・・・たしか、何者かにメッタ刺しにされ福島県の病院で寝たきりの身だったな・・・！」

「はい・・・噂では稲村はもう廃人だとか・・・それで、現在はおみさんの憲子を組長代理として立て、実際は自殺した秋葉剛と先日殺された五藤伸二郎が二人で切り盛りしていたらしいのですが、その富士見会の事務所だった場所に葛原組の看板がかけられてるんで

すよ！」

中村は椅子に座りなおし「葛原組・・・葛原星一か・・・！ 葛原のところも先代が闇討ちで殺されてるな・・・！ しかも、富士見会はコカノキをどこかで栽培しているという噂がある・・・もしそれが事実なら、富士見会が簡単に葛原の傘下に入るとは思えん！ 佐古田警部とともに探ってみてくれ！」

中村の言葉に小林は眼鏡の奥の小さな目を輝かせ ”はい” と、力強い返事を残し飛び出していった。

小林刑事は葛原組の看板が掲げられた、元富士見会の事務所の向かいにある喫茶店の隅にあるテーブルから見つめていた！

そこへ佐古田が遅れてやってきた。

「すまん！ ちょっとまっさんと会ってな。」 と、佐古田はテーブルに置かれてあったグラスの水を飲み干した。

小林はめがねの蔓を指先で突き上げながら 「葛原は今のところ変わった動きは見られません・・・それより、まっさんて・・・柊園警部補ですか？」

佐古田はホットコーヒーを注文すると 「ああ・・・柊園さんだ！」

「元気そうでしたか？」 と、小林は身を乗り出す。

佐古田は空になったグラスの水を注ぎながら 「ああ・・・相変わらずな・・・それよりまっさんから聞かれたんだが・・・小林君！

自殺した向井の遺留品の中に携帯端末があったか？」

小林は首をかしげながら 「携帯端末？？」 向井先輩がいつも持っていたあの黒い電子手帳ですか・・・ そういえば無かったですね！」

「そうだろう・・・ まっさんはそのことが気になってたらしく、滝川医師の供述を信じていなかった・・・ まっさんが言うには、向井の死には裏で富士見会が関わってる・・・ と言うんだ！」 そう言う
と、佐古田はグラスを口に運んだ。

「では、滝川医師は富士見会の命令で・・・？」

佐古田はもじやもじやの髪の毛をかき回しながら 「いや・・・ それはまだわからんが・・・ 滝川秀治はあのあと、不起訴となっている・・・ そして現在行方不明だ！！ 小林君！ 向井は富士見会のコカノキ栽培について何かつかんでいたんじゃないだろうか？ その何かを端末に残した・・・ それを富士見会が知り、滝川を利用して一連の自殺事件に託け向井の口をふさぎ、端末を奪った・・・ そう考えられないか？ そして、それらすべてが葛原が五藤を使い組んだことだとしたら・・・」

小林を見つめる佐古田の目が鋭く光った。

(な)

その後の警察による必死の、葛原組撲滅作戦も進展を見せず、月日だけが過ぎ去って行った。

そんなおりの昼下がり、滝川秀治の首つり死体が、東京郊外の廃屋で発見された。遺書らしき紙には、今までの自分のして来たことへ

の、自責の念が赤裸々に綴られていた。

地元警察は自殺として処理をしたのだった……。

「課長！ 滝川は葛原組に殺されたに違いないですよ。」

若い小林刑事は息巻いた。

「状況は自殺以外に考えられないだろう。お前何か証拠でも掴んでいるのか……?!」

佐古田が口を挟んだ。

「いえ……僕は、ただ……。」 小林は口ごもった……。

(ズ)

喫茶ひまわりの定休日、恵はアパートで朝食の準備をしていた！ コーヒーを沸かし、こんがりと焼かれた食パンとサラダ……どれも二人分用意され、二人掛けのテーブルに並べられた朝食の前には、白い写真立てに収められた向井の写真が置かれている。

「直哉！ おはよう！ 今朝はすごくいいお天気よ……私ね、あなたの端末のパスワードを考えてたの。」 そう言って恵は、沸き立てのコーヒーをカップに注いだ。

「11. 29. megu. 708……二人共通の事柄とはいえ、我ながらよく導き出したでしょ!! 直哉ったら私の写真や教会の写真……ウエディングドレスにスピーチ用の言葉……二人のことばかり入ってるじゃない。ほんとに捜査に使ってたの?」

向井の写真にニツコリ笑いかける恵の目には涙が光っていた。

恵は二杯目のコーヒーを注ぎながらつづけた。

「あなたが捜査に使ってたフォルダーはすべて、捜査一課宛にパソコン経由のメールで送っておいたわ……！！」恵はナプキンで涙を拭った。

窓の外に見える向日葵湖畔には、雪がちらほらと舞い始めていた！

春日婦警主任が中村課長のデスクにやってきた。

「課長！ 北海道の恵さんからメールが届きました！」

中村は 「ん？ 恵さん……ああ、向井の婚約者だった恵さんか？」

春日は数枚の書類をデスクに置き 「はい！ 以前、うちの青木婦警が携帯端末を拾ったんです！ それが向井刑事のものだというのがわかったので、恵さんが挨拶に来られたときに渡したんです……その中に、捜査用と言う名のフォルダーがあったので送ってきたそうです。」

書類を受け取り眺めていた中村の手の動きが止まった！

「これは……なんなんだ？……ほかのものとは明らかに違う！それに、ほかのはどれも解決済だ。なぜこれだけ文章ではないんだ？」

春日が覗き込むとそこには・・・

```
>html xmlns="urn:schemas-com-  
office" office  
xmlns="urn:schemas-com-offic  
e-word"  
xmlns="REC-html40"<
```

```
>head<  
>title< . . . 6 ; . . . 7 6 ; . . . 8 ; & amp ; # . . . 5  
0 ; ~ . . . ; & amp ; # . . . . .
```

と、不規則にただキーを打ち込んだだけのように見える暗号ともいえる文章が・・・！

春日が首をひねり 「これは・・・前に見たことがあります！ 青木婦警が警視庁のホームページを作るんだって言って、こんな文字を打ち込んでました・・・たしか、HTML という形式の文章だとか！」

「よし！ 春日君、青木婦警にこれの解説を頼んでみてくれ！ ただし、彼女が余計なことに首を突っ込まないように、君が釘をさしておいてくれよ！」

春日は一礼すると書類をまとめ、頭を掻きながら階段を下りていった。

青木雪乃婦警はパソコンの前に座り、カーソルの動きに合わせ大きな目をクリクリと動かしていた。

巧みにマウスを操っていた雪乃は、やがてモニターを指差して言った。

「春日主任！　これって、ただ単語を並べたものですよ！」

春日主任がモニターに目をやるとそこには

”五藤、アンデス、北朝鮮、ひまわり湖畔、山下、c17h21no4、強制、栽培、滝川、うつ病”

と、表示されていた！

雪乃は春日の顔を覗き込むように「これって、たぶん向井さんが何かの理由で文章として残す時間が無く、誰かの会話を速記的に単語だけ書き残したのだと思います。」

春日婦警主任は感心したように「青木さん・・・あなたすごいわねえ！　あんな暗号みたいなものを・・・」春日はそこで言葉を切りモニターを指差した。「c17h21no4・・・？？これなんでしょうね」

雪乃は大きな目を動かし「c17h21no4・・・コカインの化学式ですよ！」

春日は「コカインで・・・なんであなたそんなこと知ってるのよ？」

「前に言ったじゃないですか！　私刑事志望なんです・・・今は、少し心が折れてますけど・・・それよりコカインは道德観念をぶっ飛ばしてしまうほどの高揚力と、強い精神的依存性を持ちます。現

在のような暗い世情の時こそ惑わされやすいドラックですね。」と、春日を見つめながら言った。

青木の解読した文章は印刷され、中村課長のもとに届いた。

デスクの上で文章を睨みつける中村・・・ドアがノックの音とともに開いた。

中村が振り返ると、そこにはハンティング帽をかぶった初老の男がもみ上げをつまみながら無言で立っていた！

初老の男が口を開いた「課長！お久しぶりです」と頭を下げる。

「おーっ！・・・まつさーん！！」

枅園は帽子を取ると中村の前に腰を下ろし、デスクの上の文章を指差しながら言った。

「課長！ そいつは向井の残したモンですね、じつは私はあれから滝川を監視してました・・・もちろん、刑事をやめた今滝川をどうこうというんじゃないんです・・・ただ向井の死の真相を知りたかった！ その文章は恵さんから私のもとに一足早く送られてきた・・・その道の人に分析を頼み、私なりに真相に突き当たった・・・！」

もみ上げをつまむ枅園の目に、刑事の色がよみがえっていた。

（な）

・・・私なりに真相に突き当たった・・・。」

その言葉に、中村課長は柊園の方へ身を乗り出してきた。

「それは・・・」と言いながら、柊園は柔道の”あて身”を中村に思い切り叩きつけた。

不意をつかれた中村は、白目を剥きその場に崩れ落ちた・・・。

「課長！済まない・・・。」

柊園は中村の内ポケットから銃をしまっており鍵を取り出した。

捜査課にはその時、誰も居ないのを確認していた柊園であった。

柊園は拳銃を奪い逃走した。

行き先は葛原組がたむろしている、赤坂のナイトクラブ”スターラ
ブ”

拳銃を胸に秘めた柊園の思いつめた顔を、大都会のイルミネーションが

妖しく彩っているのであった・・・。

「これからの関東・・・いや日本を仕切るのは葛原組だ。」

東京赤坂のナイトクラブで、二代目星一と幹部たち数人が祝杯をあげていた。

「これからのやくざは、ここだよ。」二代目は指先で自分の頭を指

差した。

幹部たちは、ニヤニヤしながらうなずき合った。

「あの端末を持って要するという女はまだ見つかっていませんが・・・」

一人の組員が心配そうに言った。

「赤木。そう心配するな、実家の岩手から北海道に渡った事は分かっているんだ。見つかるのも時間の問題だ。」

二代目は酒の勢いか、そう気にはしていない風であった。

その時一人の客が、ナイトクラブのドアを開け入って来た。

ハンティング帽をかぶった初老の男である。

その初老の男は、葛原組がたむろするテーブルに音もなく近づいて行ったのであった・・・・・・。

「・・・誰だお前は?!」

自分たちのボックスの前に現れたハンティング帽をかぶった初老の男に、葛原組ナンバー2原田は凄んだ。

初老の男は無言のまま懷から拳銃を取り出し乱射した。

ホステスの悲鳴や従業員・客たちの怒号の中、葛原組二代目や幹部

たちは真っ赤な血の海に沈んでいた……………。

柊園は走っていた。遠くでパトカーや救急車のサイレンが聞こえている。

” やってしまった。しかし、私は後悔はしていない。向井の仇を取り、並木恵を奴らの牙から救ったのだ…………… ”

・ ・ 私に失う物はもう無い、妻を数年前亡くし、子供も無く我が子のように思っていた向井も殺され……………この前、医者に癌を宣告された。

私は決心した、自分の命と引き換えにダニ（葛原組）を退治してやろうと…………… ”

柊園は向井たちが眠る慰霊碑の前に立ち、右手に持っていた愛用の拳銃

＜ニューナンプ38口径＞をゆっくり右のこめかみにあてた……………

……………一発の銃声が、大都会の闇を引き裂くように轟いた……………。

「遅かったか!？」

中村課長たちは、慰霊碑の前に静かに横たわる柊園と、右手に握られている拳銃を見つめたまま、茫然と立ちすくして居るのであった。

（ゴ）

おとそ気分もすっかり抜けて、七草正月も済んで早くも今日は10日・・・

明日は11日正月の鏡開きかな・・・故郷の酒田は小正月の準備で忙しいかも・・・

なんて独り言を言いながらアパートの朝を迎えて時計代わりにテレビをつけて

朝食の準備をしながら歯磨きをしている並木 恵・・・

その時いつものようにテレビの朝のニュースが始まり・・・

「また元刑事がピストル自殺をしました・・・」

テレビを背にして歯磨きをしていた恵は・・・

「また刑事が自殺したの？・・・最近は良くあるわね・・・」

なんて独り言を言ってた恵は次のテレビ報道で愕然とする！！

「元刑事の身元の名前は枅園・・・」と聞いた所で持ってたコップが・・・

「ガチャ~~~~ン!!!!!!」

「え~~~~!!・・・まさか??!!」と言いながらテレビの画面に釘付けになる並木 恵・・・

更にテレビの報道はつづく・・・

「昨夜、暴力団葛原組の経営するナイトクラブで拳銃の乱射事件があり、現場に居合わせた葛原組ナンバー2原田や葛原組二代目や幹部達は全員射殺され、打った犯人は枡園元刑事と判明し今朝元部下向井刑事達の眠る慰霊碑の前で自殺している遺体が発見された・・・」

「このあいだ枡園さんに手紙を出したばかりなのに・・・」

朝食もそこに支度をして玄関の郵便受けに手を入れるとそこに枡園元刑事からの手紙が来ていた・・・

(ズ)

それは数枚の便箋に達筆な文字で綴られていた！

『前略 向井恵様 先日、向井直哉君のご両親にお会いし、貴女様が直哉君の死亡届けを提出前に、婚姻の義を執り行った事を知らされました。』

貴女の直哉君への深い愛、大切な一人息子を失ったご両親の無念さ・・・それらを考えると私の不甲斐なさを痛感いたすばかりです。

私は直哉君が熱血漢であることを知りながら単独行動させてしまいました。

全ての責任はこの私にあるのです。上司としてどんなにお詫びの言葉を並べようと、どんなに頭を下げようと、決して許されるものではない事と承知しております。

しかし、貴女と直哉君のご両親に託する以前に、私はもと刑事として……いや、一人の人間として直哉君の死の真相を暴き出さなければ、私は私自身を許せなかった！

そして、貴女が私に知らせてくれた直哉君の端末のデータから、私は私なりの結論を導き出しました……。私はすでに刑事としての職を退いており、いまさら……。と思われるでしょうが、私には時間が無いのです。真実を知ればあなたの悲しみは再び蘇る……。しかし、貴女と直哉君の婚姻を知り、貴女なら刑事の妻とし事実を受け入れられる……。そう信じ、どうしても貴女にだけは知らせなければと筆を取りました。』

恵は達筆な文字を目で追いながら、二枚目の手紙に移った！

『三大柱のうち、秋葉と岸田を失った富士見会は、勢力争いに打ち勝つため、アンデスから北朝鮮を経由して密輸したコカノキの苗を、国後島にて栽培していたのです。』

そこに狙いをつけた葛原組は、当時富士見会幹部の1人 五藤を下に引き込み、山下舞子の両親が持っていた、北海道向日葵湖畔の無農薬野菜農園を騙し取った……。そこは、コカノキ栽培に適していたのです。

葛原は、富士見会から奪い取ったコカノキの苗を、観光客が出入りする無農薬野菜農園を隠れ蓑に、舞子の両親を監禁し薬漬けにして栽培をさせる計画を立てていました。

ここで、栽培されたコカノキをコカインとして生成するため、葛原は薬物の知識のある滝川秀治を言葉巧みに仲間へと引き入れた。

そして、舞子は両親の借金のかたに富士見会に身柄を拘束された。

しかし、それもまた葛原の筋書通りであったのです。

舞子の身柄拘束は、両親を逃げられないようにするための人質でしかなかったのです・・・そうとは知らず、舞子は金で売られたと両親を憎んだ！

舞子は金と我が娘を天秤にかけた両親に復讐するため、五藤の正妻の座に付いたのです。

そして、ころあいを見計らい、葛原は富士見会に奇襲をかけた・・・三大柱を失った富士見会は呆気なく崩れ去った・・・しかし、最近まで富士見会の看板は掲げられたままであった、おそらく葛原としては警察の目をくらませるためそのほうが都合がよかったのでしょう。

数日後・・・五藤と舞子は、舞子の命の保障と引き換えに両親を農園に監禁する計画を実行に移した。

それらの計画を事前に話し合うため “葛原星一” 五藤と舞子

そして滝川医師が集まり滝川の勤めていた榊原診療所の一室で交わしていました！

それを加島礼子を追っていた向井刑事が偶然聞いてしまったのです。

『

恵は二枚目の手紙を読み終えると、顔を上げ窓の外を見た。

はらはらと舞う雪が向日葵湖の水面に落ちては消えていった！

はかなく消えてゆく雪を見つめながら、恵みはつぶやいた……

「柊園さん　！　……なんで自殺なんか……」

恵みは振り返り、テーブルの上の直哉の写真を見た！　写真の直

哉はやさしく微笑んでいる……恵みは心の中で呟いた！　“

柊園さん！　私は……いいえ、私も直哉さんもあなたに感謝の気

持ちでいっぱいです。　あなたの事を恨んだ事など一度もありません！

直哉さんはあなたの事をいつも自慢にしていたのに……

素晴らしい上司に廻り合えて最高に幸せだって……それなのに、

どうして自殺なんか……どうして……”

恵は溢れ出る涙を袖口で拭うと、三枚目の手紙に目を落とした。

『物陰に身を潜め会話の主要部分を端末に残していた向井刑事に五藤が気付いた。』

葛原にピストルを突き付けられ、向井刑事は力づくでドグマチールを飲まされたのです！　そして、結果……向井は滝川の誘導自己暗示に操られ、あのビルから身を投げたのです。

後日、滝川は診療所の片隅に端末を見つけ、処分を頼むため葛原組に向かう途中迂濶にも無くしてしまった！

それを偶然にも警ら中の青木婦警が発見し、落とし物の1つとして署内に保管されていたのです。

端末があなたの手元に戻ったのは、向井直哉というすばらしい刑事の魂が導いたものであると、私は信じて疑いません！

葛原星一という男は、私利私欲の為なら我が親でも殺すような男です。
実際、葛原組の先代は闇討ちで殺され、犯人は捕まっています！

五藤も舞子の手で殺されました・・・それも葛原の計算のうちなのです。

葛原は舞子に、お前は両親に売られたのではなく、ただ五藤に利用されたのだ・・・と、舞子が五藤を憎むように仕向けたのです。
単純といえば単純ですが、舞子という女性は人を疑う事を知らぬ澄んだ心の持ち主だったのです！』

恵は何度も目頭を押さえながら、手紙の最後一枚に目を移した。

『五藤を刺し殺した舞子は、葛原の手下の手で射殺されました・・・手を下した三村という男は富士見会の人間であるため、自首した今も葛原は蚊帳の外を決め込み、警察の手が伸びることは無いのです！

私は警察の枠の中にいれば、本当の悪は倒せないと実感しました・・・そして刑事をやめ、真実を知るため滝川医師の尾行を続けていたのです・・・そんなある日のこと、私は自身の身体の異変に気づきました・・・いや、本当はもっと前からわかっていました、私には時間が無いことを！

そして私は、廃屋に逃げ込んだ滝川を問い詰めました！

滝川は葛原のあまりのやり口に恐れをなし、手を貸したことへの後悔と不安に苛まれていたらしく、涙ながらにすべてを話してくれま

した。

その翌日、滝川秀治の首つり死体が、郊外の廃屋で発見されたのです。

警察の発表によると、自分のして来たことへの、自責の念が赤裸々に綴らた遺書が残されていた、との事だったが、私と話したとき滝川は自首を考えているようでした……おそらく、それを恐れた葛原の仕組んだ偽装殺人に違いないのです。

私は怒りで体中が熱くなるのをこらえきれませんでした……桜の大紋を背負った警察が手を出せないなら、この私が……！

恵さん！　あなたがこの手紙を手にするころにはすべてが終わっているはずです。

北海道という新天地で愛する人と平穏に暮らす、そんな貴女の心を乱してしまった馬鹿な年寄りをお許しください。』

恵は手紙を読み終えると、枳園の優しい笑顔を思い浮かべていた……

（な）

翌朝……

喫茶ひまわりの模子ママに、恵は二三日休みが欲しと……呟いた。

模子ママは、恵に背を向けたままモーニングに使うキャベツを切っ

ていた。

弘美は寝坊してまだ来ていない。

「模子ママ・・・?!」

「行ってらっしゃい・・・でも、きっと帰って来るのよ!!」

模子ママは振り向き、恵の目を見つめたまま強い口調で言った。

「ありがとう、行って来ます・・・。」

恵は模子ママの口調に、肉親にも似た優しさを感じていた。

・・・・・・・・・・・・・・・・

「模子ママ・・・遅くなりましたあ。あれ、恵さんも寝坊かな?!」

弘美は喫茶ひまわりに入って、あたりを見回しながら微笑んでいた。

「・・・・・・・・・・。」

模子ママはキッチンで背を向けたまま、手を動かし続けるだけで何も言えなかった。

東京・・・!

・・・人々の夢を食べて巨大になって行く大都会の夜・・・。

その、犠牲に成った人たちの慰霊碑の前で、ひとりの女が手を合わせていた。

長い間、その女は顔を上げる事無く両手を合わせ続けている……。月光に照らされたその女の顔は、この世の美しさを超越しているかのようにあった。

(ズ)

そのころ……

山下牧夫は火の着いた “たいまつ” を手にしていた。

「いいな！ やるぞ！」 牧夫の震える声に妻の菊枝が無言でうなづく……。 “たいまつ” は牧夫の手を離れ、撒き散らされた灯油に引火すると、抱きあう老夫婦を包んでいった！

やがて炎は全てを焼き付くし、北海道の広大な大地に 「無農薬野菜農園」 と書かれた看板だけが残されていた。

こうして、葛原星一率いる関東随一と言われた暴力団葛原組の野望は、老いた元刑事と老夫婦の命と引き換えに、壊滅と言う形で打ち碎かれたのであった。

しかし、人々の心には、また新たな夜が忍び寄るだろう……。息を殺し……。足音を忍ばせ……。

大都会の夜に始まりも終わりもない！

色とりどりのネオンという仮面を被り人々を欺く・・・

人は笑い、人は哀しむ・・・

人は怒りにうち震え、人は絶望に涙する・・・

欲と快楽に満ち溢れ、憎悪と狂気が乱舞する大都会の夜

だがその素顔は誰も知らない・・・！

共作小説

大都会の夜

(完)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5700e/>

共作小説・大都会の夜

2010年11月12日22時03分発行